

教科
用
中古歌選

三輪義方纂

全

116

102

086291-000-7

116-102

中古歌選

三輪 義方/編

M34

DBD-1063



三輪義方纂

教科
適用
中古歌選

東京

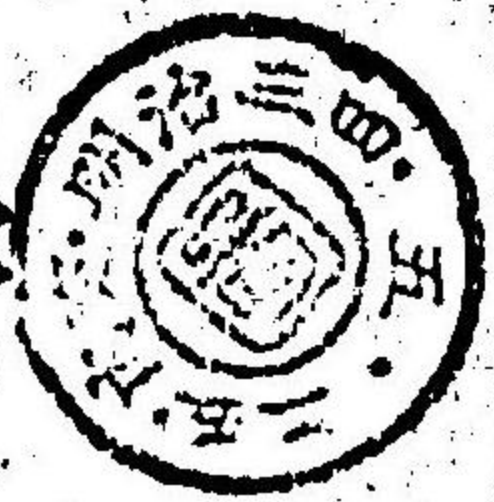
目黒書房
成美堂 命本

教科
適用
中古歌選

緒言

一歌よみ習ふ生徒に、いまづ三代集を授けて、正しき歌のすぢを知らしめ、さてなほ、あまりの日敷あらんに、新古今集などを、讀ませて、後鳥羽院天皇の御世より、歌の姿の、一變じつることなどを、一わたり、知らせまほしきを、是らの集どもを、全部皆がら授けん、いごまいるわざにて、たやすからぬを、學年への限あり、歌書講せんために、さて、あてられたる、授業の時間の多からぬは、かねてのあらましの、三ツか一ツにもたらず、いつもやみぬることを、あかぬこゝちのせらるれ、されば、學年のうちに、授けをへぬべきほどを、測りて、各集の中より、必要と思はるゝ歌のみを、えらばいでて、かくいあつ

通教
用科
中古歌
精選



歌よみ習ふ生徒に、まづ三代集を授けて、正しき歌のすぢ
を知らしめ、さよなほ、あまりの日敷あらんに、新古今集な
どもを、全部皆がら授けん、いこまいるわざにて、たやすか
らぬを、學年に限あり、歌書講せんために、こて、あてられた
る、授業の時間、多からぬは、かねてのあらましの、三ッか一ッ
にもたらず、いづもやみぬるこそ、あかぬこゝちのせらるれ、
されは、學年のうちに、授けをへぬべきほどを、測りて、各集の
中より、必要と思はるゝ歌のみを、えらびいでて、かく、あつ

めたるになん

一抑三代集の歌、いづれか、錚々の聲をからん、それが中にも、殊に秀歌として、古來世に、めで來にけるたぐひを、宗の選ひつ、さるに、後撰の中などに、おなじき白玉といふ中にも、今の世の人には、ふこの、聞取りがたさいひななる、はた、耳馴れぬてに、をはなとも、うちまじれるを、殊更に、えりいせたる、初學の人の、見聞をひろめ、道の知識を増さんには、是らの歌を、こき聞かするも、用なきことに、あらじと、思ひてのわざなり

一新古今集の歌の、華美なる詞づかひ、高遠なる心はへり、最もよみすべく、最も愛すべし、されど、今の世に、まねびよむべき、姿ならぬこと、誰れもいふことなれど、かの集ごても、また盡く、さる歌のみならんや、その既に、先哲もいはれしが如く、

集中の歌に、今も本とすべきたぐひも、少なからぬは、此の書に、彼れ此れを、まじへ採りて、その辨別、講義の折々に、いひしらせん

一附録として、萬葉集の歌を、いさゝか摘み出でたる、長歌の體をも、かつかつ知らしめんてなり

一この書、稿成りて、試に、關根大人に見せけるに、大人賛同して曰へらく、余も此の頃、中古文選を編じて、科本にあてんの企あり、此の書幸に、中古歌選と題號して、それと一雙のもの、せん、いかにかあるに、思ひかけぬことの、よろこばしさにたへず、やがて書肆に囑つ

一此の書を緝めし、こみの業なるに、暇あらぬ身にさへあれは、訂正なども、いたらぬふと、多かるべし、されば、撰び入れぬべきが、洩れたる、さしもあるが、取り入れられなと

たるも、少なからぬなるべし、そは後にもあらためてんこそ
一近古及び近世の歌どもをも、つぎくに撰びあつむべくな
ん

明治三十四年五月

纂者 志 爾 子

適用科 **中古歌選** 卷の上

三 輪 義 方 纂

古今集春歌

ふることに、春たちける日、よめる

在 原 元 方

年のうちに春の來にけりひこし世をこそこやいはん今年こやいはん
春立ちける日、よめる

紀 貫 之

そてひちてむすひし水のこはれるをはるたつけふのかせやこくらん

題とらす

よみ人しらす

春かすみたてるやいつこみよし野のよし野のやまにゆきふりつよ
こよろさと深くそめてしをりけれはさえあへぬゆきの花に見ゆらん

雪のふりけるをよめる

きのつらゆき

かすみたち木のもはるの雪ふれはなよきさこもはなを散りける

春のはじめによめる

藤原ことなは

春やこきはなやおそきこ聞きわかんうくひすたにも鳴かすもある哉

春のはじめの歌

みぶのたゞみね

春きぬこひこいへこもうくひすの鳴かぬかきりのあらしこそ思ふ

寛平御時、きさいのみやの歌合のうた

在原棟梁

春立てこはなもにははぬやまさこいものうかるぬにうくひすを鳴く

たいとらず

よみ人しらす

野へちかく家るしせれ^なのうくひすのなくなる聲のあさなあさなまき

あつさ弓おしてはるさめ今日ふりぬあすさへふらわか菜つみてん

西大寺のはこりの柳をよめる

僧正遍昭

あさみこりいこよりかけてあら露をたまにもぬけるはるのやなまか

題しらす

よみ人しらす

もよちこりさへつる春のものここにあらたまれこもわれそふりゆく

をちこちのたつきもあらぬ山なかにおほつかなくもよふこりかな

かりのこゑを聞きてここへまかりける人を、おもひてよめる

凡河内躬恒

はるくれの雁かへるなりあらくものみちゆきふりにここやつてまこ

題しらす

よみ人しらす

折つれのをてこそにほへうめの花ありこやこくにうくひすのなく

うめの花を折りてよめる

東三條の左のねほいまうち君

うくひすの笠にぬふてふうめのはな折りてかさよんたいかくるやこ

家^にありける梅の、ちりけるをよめる

つらゆき

くるこあくこめかれぬ物をうめの花いつのひこまにうつろひぬらん
なぎさのるんにて、櫻を見てよめる

在原業平朝臣

世の中にたえてさくらのなかりせいはるのころのどけからまじ

花ざかりに、京を見やりて、よめる 素性法師

見渡せのやなまきさくらをこまかせてみやこそはるのにこまなりける

亭子院歌合の時、よめる 伊勢

みる人もなまきやまさこのさくらはなほかのちりなんのちそさかまじ

題とらず よみ人しらす

待てこいふにちらてこまる物ならにをさくらに思ひまさまこ
のこりなくちるをめてたさくら花ありて世のなかはてのうければ

櫻の花の、ちるをよめる 紀友則

久かたのひかりのこけきはるの日にまつころなくはなのちるらん

うつろへる花を見てよめる みつね

花見れつころさへにそうつりけるいろにいつてとひこもこそしれ

家にふぢの花さけりけるを、人のたちこまりて、

見けるをよめる みつね

我がやこに咲ける藤なみたちかへりすまかてにのみひこの見るらん

たいとらず よみ人も

今もかも咲きにはふらんたちはなの小まかさのやまふきはな
春さめにほへるいろもあかなくに香さへなつかしやまふきはな

古今集夏歌

題とらず よみ人しらす

わか宿のいけのふちなみさきにけりやまほこしすいつか來鳴かん
卯月に咲ける、さくらをみて、よめる

あはれてふこをあまたにやらしこや春にれくれてひこり咲くらん

題しらす

よみ人しらす

さ月まつやまほこしきす打ちはふきいまも鳴かなん去年のふること
さ月まつはなたちはなの香をかけりむかしのひこのそてのかをする
ほこしきすなかく里の敷多あれはほうこまれぬれもふものから
あこひきの山ほこしきすをりはへて誰れかまさるこねをのみそなく

寛平御時、まさいの宮の歌合のうた

きのつらゆき

夏の夜のふすかこすれりほこしきす鳴くひここゑにあくるまのしめ

さふらひにて、そのこともの、さひたうへけるためて、

郭公まつうたよめこ、ありければ、よめる

みつね

ほこしきすこゑも聞こえず山ひこりほかになくねをこたへやせぬ

月のれもころかりける夜、あかつきがたに、よめる

ふかやふ

夏の夜のまたよひなから明けぬるをくものいつこにつまやこるらん

はちすの露を見て、よめる

僧正道昭

はちす葉のにこりにたまぬころもてなにかの露をたまこあさむく

古今集秋歌

秋立つ日よめる

藤原敏行朝臣

秋來ぬこめにのさやかにみねぬこもかせのれこにをれころかれぬる

題しらす

よみ人しらす

秋かせのふきにし日よりひさかたのあまのかはらにたぬ日のをと

寛平御時、なぬかの夜、うへにさふらふをのことゆに

歌奉れど、仰せられける時、人にかはりて、よめる

友

則

あまの川あさせそらなみたさりつゝわたりはてぬけ明けそらにける
れなと御時、ささいの宮の、歌合のうた

藤原興風

契りけんころそつらきたなはたのことにひこたひあふあふか
たいとらす

よみ人しらす

そら雲にはねうちかはとこふかりのかすさへ見ゆるあきのよのつき
木のまよりもりくる月のかけみれりころつくこのあきの來にけり
もみち葉のちりてつめれる我が宿にたれをまつむとこらなくらん

初雁をよめる

在原元方

まつ人にあらぬものからはつかりの今朝鳴くこゑのめつらとさかな
題とらす

よみ人しらす

わか門にいなれほせ鳥の鳴くなへに今朝ふくかせにかりのまにけり
是貞のみこの家の、歌合のうた

よみ人しらす

れく山にもみちふみわけなくとかのこゑまきくこゑをあきのかなこま
題とらす

秋はきにうらひれをれいあじひきのやまそたごよみあかのなくらん
むかしあひまりて侍りける人の、秋の野にてあひて、

物がたりとけるついでに、よめる

みつね

あきはまの古枝に咲けるはな見れりもこのころわすれさりけり
是貞親王の家の、歌合のうた

文屋康秀

吹くからに秋のくさ木のこゑをるれりうへやま風をあらとこいふらん
石山にまうでける時、音羽山の紅葉を見てよめる

世

之

秋風のふきにと日よりれたこはやまみねの木すゑもいろつまにけり

人のせんさいに、菊にむすびつけて、うきける

在原業平朝臣

うきうき秋なき時や咲かさらんはなこそちらめ根さへかれめや

寛平御時、せられける菊合に、すはまをつくりて、菊の

花うきたりけるに、くはへたりけるうた、吹上の濱の

かたに、菊うきたりけるを、よめる 菅原朝臣

あき風の吹あけに立てるあらきくのはなかあらぬかなみのよするか

仙宮に、菊をわけて、人のいたれるかたを、よめる

そせい法師

ぬれてほす山路のさくのつゆのまにいつかちこそをわれへにけん

あらきくの花をよめる 凡河内躬恒

こころあてに折らはや折らん初霜のねきまこはせるあらきくのはな

古今集冬歌

冬のうたにて、よめる

源宗干朝臣

山さこいふゆそさひじさまさりけるひこめも草もかれぬこたも入り

題とらず よみ人しらす

大そらのつきのひかりときよけれりかけ見じみつをまつこほりける

やまこの國に、まかれりける時に、雪のふりけるを見て

坂上是則

朝ほらけありあけの月に見るまてによと野のさごにふれるあらゆき

年のはてに、よめる はるみちのつらき

きのふこいひ今日こくらして飛鳥川なかれてはやまつきひなりけり

古今集賀歌

題とらず

よみ人しらす

わたつみのはまの眞砂をかそへつゝまみか干ごせのありかすにせん
さたごきのみこのをほのよそぢの賀を、大井にて

しける日よめる

紀これをか

かめのをの山のいはねをこめてれつるたきのあらたま千代のかすかゆ

古今集離別歌

題しらす

在原行平朝臣

たちわかれいなほの山のみねにれふるまつごときかりいまかへりこん

よみ人しらす

すかる啼く秋のはきはらあさたちてたひゆくひごをいつごかまたん

源のさねがつくしへゆあみんごてまかりける時に、山

崎にて、別惜みける所にて、よめる

いのちたにこゝろにかなふものならいなにかわかれのかなじからまご

山崎より、神なびの森まで、送りに、人々まかりて、
かへりがてにして、別をこみけるに、よめる

源さね

人やりのみちならなくにれほかたのいさうごいひていさ歸りなん
今はこれよりかへりねご、さねがいひける折に、よみける

藤原かねもち

またはれてきごころの身にとあれのかへるさまに、道もあられす

たいしらす

よみ人しらす

かきくらしごはふらなん春さめにぬれきぬきせてきみをごゝめん

古今集躰旅歌

たいしらす

よみ人しらす

ほのくごあかしの浦のあさきりにたまかくれゆく舟をこそれもふ

あつまのかたへ、友とす人ひこりふたり、いざなひ
 ていきけり、三河國、八橋といふ所に、いたれりけるに、
 その川のはごりに、かまつはた、いこれもころくさけ
 りけるを、見て、木の陰にたりゐて、かまつはたといふ
 五もじを、句のかしらにすゑて、旅の心をよまんとて、
 よめる

在原業平朝臣

から衣きつゝなれにいつまとあれはるくきぬる旅をしそれゆ
 むさこの國と、おもつふさの國との中にある、すみた
 川のはごりにいたりて、都のいと戀しうれほはけれ
 ば、おぼし川のはごりにたりゐて、たもひやれば、かぎ
 りもなく、こほくもきにけるかなと、思ひわびてなが
 めをるに、わたしもり、はやふねにのれくれぬといひ
 ければ、舟にのりて、渡らんとするに、みな人物わびと

くて、京に思ふ人なくともあらず、さるをりに、おろま
 鳥のはしとあしとあかさ、川のはごりにあそびけり、
 京にへ見ぬ鳥なりければ、皆人見おらず、わたしも
 りに、これいなにどりぞと、問ひければ、これなんみ
 やこ鳥といひけるを、まよてよめる

名にこれはいさこころはん都鳥わかたもふ人はありやなとやこ
 朱雀院のならにれはしまとける時に、たむけ山にて、

よめる

すがはらの朝臣

このたひぬさも取りあへず手向山もみちのにしきかみのまに
 たむけにいつりの袖もさるへまにもみちにあけるかみやかへさん

そせい法師

古今集哀傷歌

堀河太政大臣、身まかりにける時に、深草の山に、をさ

めてける後に、よみける

侍 都 勝 延

うつせみのからをみつよもなくさめつふかくさのやまけふりたにたて

藤原たゞふさが、むかじあひをりて、侍りける人の、身

まかりにける時に、こふらひにつかはすこて、よめる

関 院

さきたよぬくいのやちたひかなじきりなかるよみつのかへりこぬなり

古今集雑歌

題しらす

よみ人しらす

我がうへにつゆそれくなるあまの川さわたるふねのかいのとつくか

うれしさを何につよまんからころもたもと豊かにたてこいはまじを

むらさきのひこもこゆゑに武藏野のくさはみなからあはれこそみる

めのれごうごをもて侍りける人に、うへのまぬをたく

るこて、よみてやりける

なりひらのあそん

むらさきのいろ濃き時のめもはるに野なるくさ木をわかれさりける

五節の舞姫を見て、よめる

よしみねのむねさだ

あまつかせ雲のかよひち吹はこちよをこめのすかたさはしこよめん

題しらす

よみ人しらす

我がこよろなくさめかねつさらそなやをはすて山にてるつさを見て

なりひらのあそん

大かたのつさをもめてここれそのつめれひこのたれいこなるもの

よみ人しらす

いその上ふるから小野のもこかじりもこのころうわすられなくに

いにしへの野中のあみつぬるけれもこのころをこるひこそくむ

いにしへのあつのをた巻いやこもよせもさかりありしものなり

世の中にふりぬるもの津のくにのなからのはと我れとなりけり
 笹の葉にふりつむ雪のうれをねもみもこくたち行く我がさかりはも
 なりひらのあそんの母のみこ、長岡にすみ侍りける
 時に、なりひら、みやづかへすこて、時々も、えまかり
 こふらはす侍りければ、おはすばかりに、はよのみこ
 のもこより、こみの事こて、ふみを、もてまうでまたり、
 あけてみれば、こはよなくて、有りけるうた

返し

業平朝臣

世の中にさらぬわかれのなくもかな千代もこいのるひこの子のため
 題とらす

よみ人しらす

千早ふる宇治のはしもりなれをしそあはれこの思ふことへのぬれん
 かくこつゝ世をやつくさん高きこの尾のへに立てるまつならなくに

わたつみのかさこにさせる白たへのなみもてゆへるあはちとまやま
 わたの原よせくるなみのおはくもみまくのほこしたまつしまかも

屏風のゑに、よみあはせて、かきける坂 上 是 則

題とらす

よの中へゆめかうつゝかうつゝこゆめこもとらすありてなければ
 ふるのいまみち

おりにけんさよてもいこへ世の中へなみのさわきにかせをそくめる
 そ せ い

いつくにか世を厭はんころこそ野にもやまにもまこふへらなれ
 よみ人しらす

世の中をいこふやまへのくさ木こやあなうの花のいろにいてにけん
 木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはとにわか身なりぬへらなり

れきのくによながされて侍りける時によめる

たかむらのあそん

思ひきやひなのわかれにれころへてあまのなはたさいさりせんころ

田むらの御時に、事にあたりて、津の國の、すまごいふ

所に、こもり侍りけるに、宮のうち侍りける人に、つ

かはしける

在原行平朝臣

わくらはにこふ人あらの須磨の浦に藻をほたれつゝわふこたへよ

人をこはで、久じうありけるをりに、あひてうらみけ

れはよめる

みつね

身をすてゝ行きやまにけん思ふよりほかなるものゝころなりけり

題とらず

よみ人しらす

いさこゝにわか世の經なんすか原やふじみのさこのあれまくも惜し

我がいはみわのやまも戀しくゝこふらひ來ませすき立てるかこ

誰かみをきゆふつけ鳥かからころもたつたのやまにをりはへて鳴く

きせん法師

わか庵のみやこのたつみまかを住む世を宇治やまごひこゝいふなり

はつせにまうづる道に、ならの京に、やどれりける時、

よめる

二條

人ふるすさごをいこひてこゝかこもならのみやこもうま名なりけり

後撰集春歌

元日に、二條のまさいの宮にて、白きおほうちまを、

たまはりて

藤原敏行朝臣

ふる雪のみのゑろころもうちまつゝはるきにけりこたころかれぬる

ある人のもごに、にひまるりの女の、侍りけるが、月日

久しくへて、む月のついたち比に、まへゆるされたり

けるに、雨のふるをみて

よみ人しらす

をら雲のうへをけるけふをはるさめのふるにかひある身ごのちりぬる

朱雀院の子日に、たはしまとけるに、さはる事侍りて、

えつかうまつらすして、延光朝臣に、つかはしける

左大臣

松もひきわかかなもつますなりぬるをいつしかさくらはやも咲かなん

院御返と

まつにくる人となけれの春の野のわかかなもなにかひなかりけり

前裁に紅梅をうゑて、又の春、れそく咲きければ

藤原兼輔朝臣

やごちかくうつしてうゑるかひもなくまちはにのみにほふはな哉

延喜御時、歌めとけるに、奉りけるさのつらゆき

春かすみたなひきにけり久かたのつきのかつらもはなやさくらん

かへる雁を聞きて

よみ人しらす

かへるかり雲路にまこふこゑすなりかすみふまごけこのめはるかせ

題しらす

讀人しらす

たちわたる霞のみかひやまたかみ見ゆるさくらのいろもひごつを

寛平御時、花の色、霞にこめて見せずといふ心を、よみ

てたてまつれど、たはせられければ藤原興風

「やまかせの花のかかこふもごにいはるのかすみをはたとなりける

花のもごにて、かれこれ、ほともなく、ちる事など、申

とけるついでに

貫之

春くれのさくてふこをぬれぬにさするはかりの花にそありける

月のれもしろかりける夜、花を見て源さねあきら

あたら夜の月あはれはなごをなしくあはれころをれらんひごに見せはや

あがたのるといふ家より、藤原治方に、つかはしける

橘のきんひらの女

みやこ人きてもをらなんかはつなくあかたのるこのやまふきのはな
櫻川といふ所、ありきまよて つらゆき

つねよりもはるへになれいさくら河はなのなみこそまなくよすらめ

前裁に、やまふきある所にて 兼 輔 朝 臣

わかきたるひこへ衣のやまふきのやへのいろにもれくらさりけり

やよひはかりの、花の盛に、道まかりけるに

併 正 遍 昭

をりつれいたふさにけるたてなからみよのほごけに花たてまつる

あつみのみこの、花見侍りけるころにて

源 仲 宣 朝 臣

ちるころのうきもわすれて哀れてふこころをさくらにやこつるかな

たいとらす よみ人しらす

をじめこも春のかきりのけふの又ゆふくれにさ入なりにけるかな

後撰集夏歌

たいとらす よみ人しらす

匂ひつらりにしはなぞれもほゆるなつみこりの葉のみまけれん

思ふ事侍りける比、郭公をまよて

をりはへてねをのみそなく郭公をけさなけきのえたここにあて

四五月ばかり、こほき國へ、まかりくたらんこする比、

ほこぎすをまよて

ほこぎす来ていたひこや鳴わたるわれのわかれのをこきみやこを

たいとらす

玉くとけあけつるほごのほこぎすたふたこあもなきてことかな

ほこぎすあかつまかたのひここあいうきよのなかをすくす也けり

なつこのよの月のはさなくあけぬれにあしたのまをそかこちよせつる
かさよきのみねこひこえてなきゆけいなつこの夜わたる月をかくるよ

後撰集秋歌

惟貞のみこの家の歌合に

よみ人しらす

にはかにも風のすよしくなりぬるかあきたつ日このうへもいひけり
たいしらす

うちつけにものそかなとき木葉ちる秋のはじめをけふそこれゆへ
あき風のうちふきをむるゆふくれのそらにこころをわひしかりける

大江千里

露わけしたもこほすまもなきものをなきあきかせのまたきふくらん

七月七日にゆふかたまでこんごいひて侍りけるに

雨ふり侍りければまでこぞ

雨ふりて水まさりけりあまの河こよひのよそにこひんこや見し

返し

よみ人しらす

水まさりあさき瀬をらすなりぬこもあまのこわたるふねもなきやん

たいしらす

あまの川なかれて戀ひはうくもをあるあはれこれもふ瀬にはやく見ん

たなはたをよめる

さのともものり

けふよりの天のかはらのあせなよんをこひこもなくなつわたりなむ

たいしらす

柴平朝臣

ゆくはたる雲のうへまでいぬへくのあきかせふくこかりにつけこせ

是貞のみこの家の歌合に

壬生忠岑

松のねにかせのちらへをまかせていたつたひめこそあさひひくらと

秋大輔がうづまさのかたはらなる家に侍りけるに

をぎの葉に文をさしてつかはしける

左 大 臣

山さこの物さひとさの萩のはのなびくここにそれゆひやらる

題とらす

小野道風朝臣

はにの出てぬいかにかせまはを薄身をあさかせにすてやはてん

れなし御時平の御の女郎花合に

よみ人しらす

をみなへと花のころのあたなれあまにのみこそあひわたりけれ

亭子院の御前の花のいこれとろく朝露のれける

をめてして見せさせたまひて

法 皇 御 製

あら露のかはるも何かをこからんありてのちもやうきものを

御返と

せ

うゑたてし君かあめゆふ花なれたまに見てやつゆめくらん

人のもこに尾花のいたかきをつかはしたりけれ

は返事に忍草をくはへて

中 宮 宣 旨

花すしきはに出るこもなき宿のむかしのふのくさをこそ見れ

返と

伊 勢

宿もせにうゑなめつしを我のみるまねくをはなにひこやこまるこ

題とらす

よ み 人 も

れはかたにれくあら露も今よりのころしてこそ見るへかりけれ

右 大 臣

露ならぬ我身これもへと秋のよをかくこそあかせれさるなからも

八月中の十日はかりに雨のをほふりける日をみな

へとほりに藤原のもろたをのべに出しておそ

くかへりければつかはとける

左 大 臣

くれはての月もまつへをみなへとあめやめてこられもはさらなん

萩の花を折りて人につかひすこて

時雨ふり降りなの人に見せもあへすちりなをこみをれるあさはま

たいとらす

よみ人しらす

わか袖に露をおくなるあまのかはくもの志からみなみやこすらん
大そらにわか袖ひこつあらくなくにかなしくつゆのわきてれくらん

秋の歌にてよめる

よみ人しらす

秋のよの月のかげこそ木のまよりおちはころもこ身にうつりけれ
秋のよの月にかさなる雲はれてひかりさやかに見るよしもかな
あきくれのおもふ心をみたれつしまつもみちはこちりまさりける

人につかひとける

兼 覽 王

秋きりのはるよのうれしをみなへしたちよるひこやあらんと思へは

題とらす

よみ人しらす

をみなへし花のさかりにあきかせのふくゆふくれをたれにかたらん
たれきけこなく雁かねそわかやこのをはなかす系にすきかてにして
いつれをかわきて志のはん秋のよにうつろはんこていろかはるくさ

なごさらに秋かこころんからにこきたつたの山のもみちするよを

あたなりこわれの見なくに紅葉をいろのかはれるあきらなけれ

こなりに住み侍りける時、九月八日、いせが家の菊に、

綿をきせに、つかはしたりければ、又のあしたをりて

かへすこて

い せ

かすゑらす君かよはひをのはへつよなたよるやこのつゆこならなん

返と

藤 原 雅 正

露たにもなたよるやこの菊ならのはなのあるしやいくよなるらん

たいとらす

よ み 人 も

きくのはななか月こに咲きくれひさしきこころあきやゑるらん

ほかの菊をうつことうゑて

ふるさこをわかれてさける菊の花たひなからこそにはふへらなれ

たいとらす

なほさりに秋の山路をこえくれはたらぬにしきをきぬひとそなき
風のおこのかさりと秋やせめつらん吹くるここにこそわひとま
紅葉にたまれるかりのなみたにいつきのかけこそうつるへらなれ

其 之

日くらとの聲もいそなく聞ゆるあきゆふくれになれなりけり
菊の花をれりて、人のいひ侍りければ

よみ人しらす

いたつらに露にれかるゝ花かごてこころもあらぬひとやをりけん
身のなりいそぬこを、思ひなげき侍りける頃、紀友
則がもこより、いかにぞ、こふらひにおこせて侍り
ければ、返事に、菊の花ををりて、つかはとける

藤原忠行

枝も葉もうつろふ秋の菊なれはてはかひなくなりぬへらなり

かへと

友

則

あつくもてよはひのふてふ花なれは千世のあきにそかけはけら
をここの花かつらゆはんこて、菊ありける所に、こひに
つかはとたりければ、花につけて、つかはとける

よみ人しらす

みな人にをられにけりこさくの花きみかためにそつゆはれさける
たいしらす

ふくかせにまかする舟や秋のよのつきのうへよりけふこくらん

後撰集冬歌

題しらす

よみ人も

神無月ふりみふらすみさためなきあくれそふゆのはじめなりける
獨ぬるひとのさかくに神無月にはかにもふるはつあくれかな

かみなつきまくれはかりのふらすとてゆまかてにさへなごかなるらん
雪のあした老をなげさて 其 之

ふりそめて友まつ雪のうはたまのわかろかみのかはるなりけり
返と 兼 輔 朝 臣

くろかみの色ふりかふるをら雪のまちいつる友のうごくそ有ける
又 つ ら ゆ き

黒かみと雪このなかのうき見れりごもかよみをもつらごそ思ふ
返と 兼 輔 朝 臣

年ここにあらがの敷をます鏡見るにそゆまのこもりありける
題とらす

あらたまの年をわたりてあるかうへにふりつむ雪のたえぬをら山
なかれゆく水こほりぬる冬さへやなほうさくさのあごのこよめぬ
あまの川冬こほりにごちたれやいとまにたまつたごたにもせぬ

後撰集雑歌

仁和のみかどさがの御時の例にて、せり川に行幸と
給ひける日 在原行平朝臣

さかの山みゆきたえにしせり川のちよのふるみちあごありけり
おなじ日、たかゞひにて、かりぎぬに、つるのかたをぬ
ひて、書き付けたりける

れきなさひ人なごかめそかりころもけふはかりこそたつもなくなる
相坂の關に、菴室をつくりて、すみ侍りけるに、ゆまかふ
人を見て 九

これやこのゆくもかへるもわかれつゝあるもをらぬもあふさかのせま
西院のきさき、ねほんぐしれろさせ給ひて、おこなり
せたまひける時、かの院の中島の松をけづりて、かさ

付け侍りける

れこにまき松かうら島けふを見るうへもこころある蟹の住みけり
おほなき年、たよみあへてご侍りけれや

た い み ね

おほこいへいなくてもからき世の中いかにあへたるたよみなるらん

ひたよれ、こひにつかりしけるに、うらなんなき、それ

つまじこや、いかゞこ、いひたれや 藤 原 元 輔

すみよとのまごはいはとおきつ波をほうちかけようらんなくとも

法皇はじめて、おほんぐとよろと給ひて、山おみと給

ふあひた、まきさきをはじめ奉りて、女御、更衣猶ひごつ

院に、さふらひ給ひける、三年といふになん、みかとか

へりれいしまじたりける、むかしのまご、れなご所に

て、れほんぐと、おろと給ひけるついでに

七條のまきさき

ここの葉にたえせぬ露のれくらんやむかとおほゆるまごるしたれい

御返し

伊 勢

うみごのみまごるの中いなりぬめりそなからあらぬかけの見ゆれい

太政大臣の、左大将にて、すまひのかへりあるじ、若侍

りける日、中將にて、まかりて、事をはりて、これかれ

まかりあかれけるに、やんごこなき人、二三人ごごめ

て、まらうとあるじ、さけあまたよびのよち、あひにの

りて、子どものうへなど、申しける次でに

兼 輔 朝 臣

人のれやの心いやみにあらねども子をおもふみちにまごひぬる哉

女ごもたちのもごに、つくごより、さむごごき、心ざす

ごて

大江玉淵朝臣のむすめ

なにはかたなにしもあらずみをつくしふかきこころのあらはかりそ

忠房朝臣つのかみにて、新司はるかたがまうけに、屏

風てうじて、かの國の名ある所々、悉にかよせて、さ

ひ江といふところに、かけりける た い み ね

年をへてにこりたにせぬさひ江にいたまもかへりていまをすむべき

兼輔朝臣、宰相中將より、中納言になりて、又の年、のり

弓のかへりたちのあるじにまかりて、これかれ、思ひ

をのぶるついでに 兼 輔 朝 臣

ふるさこのみかさの山にほはれこころのむかこのうごからぬかな

いたくここのむよこを、ここの人のいふこきよて

高 津 内 親 王

なほき木にまかれる枝もある物をけをふまきすをいふかわりなき

題 しらす

貫 之

世の中はうき物なれや人ここのこにもかくにもまてぬくるこき

くちなしある所に、こひにつかはしたりけるに、色の

いごあじかりければ

こゑにたてよいはねこゑると口なごのいろのわかためうすまなりけり

つくとのあら河といふ所に、すみ侍りけるに、まへよ

り大貳藤原興範朝臣の、まかりわたるついでに、水た

べんこて、うちよりて、こひ侍りければ、水をもて出て、

よみ侍りける ひ が き の 姫

年ふれのわかろかみもあら川のみつづくむまぞれいにけるかな

故女四のみこの後のわざせんこて、ほたいじのすゝ

をなん、右大臣もこめ侍るこきよて、此すゝれくるこ

てくはへ侍りける 眞 延 法 師

れもひ出のけふりやまさんなき人のほこけにされるこのみ見のきみ

かへし

右大臣

道なれるこのみたつねて心さしありと見るにそねをいましてける

前裁のなかに、すろの木、ねひて侍るときよてゆき

あきらのみこのもこより、一木こひにつかひたり

けれづくは入てつかひとける 眞延法師

風霜にいろもこよるもかひらねあるとにたるうゑ木なりけり

かへし 行明のみこ

山ふかみあるとにたるうゑ木をい見えぬいろこそいふへかりける

はじめて、かへらおろし侍りける時、物にかき付侍り

ける 遍昭

たらちめのかくれこてしもうはたまのわかろかみをなてすや有けん

身のうれへ侍りけるとき、つのかにしまかりて、すみ

はじめ侍りけるに なりひらの朝臣

なにはつをけふこそみつの浦ここにこれやこのよをうみわたるふね

拾遺集春歌

平さたぶんが、家歌合によみ侍りける

壬生忠岑

春たつこいふはかりにやみよこのよやまもかすみてけさの見ゆらん

冷泉院の御屏風のゑに、梅花ある家に、まらうとき

たる所 平兼盛

わかやこの梅の立枝や見えつらんれもひのほかにきみかきませる

齋院御屏風に みつね

香をこめてたれをらさらん梅花あやなしかすみたちなかくしそ

子にまかりれくれて、侍りける頃、東山にこもりて

中務

さげのちるさかねのこひし山櫻たもひたえせぬはなのうへかな

菅家萬葉集の中に

よみ人しらす

あきみどり野への霞のつよめもこほれてにほふはなさくらかな

天曆御時御屏風に

たゞみ

春くれのまつそうち見るいそのかみめつらしけなきやまたなれこも

たいしらす

よみ人しらす

さくらかり雨のふりさぬれなくぬるこもはなのかけにかくれん

拾遺集夏歌

天曆御時歌合に

大中臣能宣

なくこそゑりまたさかねこもせみのはのうすきころもつたちそまにける

冷泉院の東宮におのしましける時百首歌たてまつ

れこ、れほせられければ

源重之

花のいろにそめし衣のをしけれのころもかへうきけふにもあるかな

北宮のもぎの屏風に

源公忠朝臣

ゆきやうて山路くらしつ郭公いまひこころのさかまほしさに

延喜御時うたあひせに

よみ人しらす

さみたれのちかくなるらしよご河のあやめの草もみくされひにけり

題しらす

識人不知

けふみれの玉のうてなもなかりけりあやめのくさのいはりのみとして

天曆御時御屏風によどのわたりする人かける所に

壬生忠見

いつかたになきてゆくらんほこよますよこのわたりのまた夜ふかきに

題しらす

中務

なつのよのうらまのこかはこなれやはかなくあけてくやとかるらん

拾遺集秋歌

あきのはじめにより侍りける 安 法 法師

夏ころもまたひとへなるうたゝねにこゝろしてふけあきのはつかせ

題とらず 安 貴 王

秋たちていくかもあらねこのねぬるあさけのかせのたもこすゝも

延喜御時、月次御屏風に つ ら ゆ き

あふさかのせきの清水にかけ見えていまやひくらんもちつきのこま

屏風に、八月十五夜、池ある家に、人遊びをたる所源 順

水のれもにてる月なみをかそふれいこよひをあきのもなかなりける

三條のささいの宮の、もき侍る屏風に、九月九日の所

もとすけ

わかやこのさくのちら露けふこにいくよつもりてふちこなるらん

大井に、紅葉のながるゝを見侍て 壬 生 忠 岑

いろくのこのはなかるゝ大井河をゆかつらのもみちこや見ん

拾遺集冬歌

百首歌の中に 源 重 之

あとの葉にかくれてすみとつのかのこやもあらはにふゆのまにけり

題とらず 紀 友 則

夕されのさは乃川原乃河霧にこもまこいせるちこりなくなり

拾遺集賀歌

うぶや乃、七夜にまかりて よ し の ぶ

君かへんやほよろつよをかそふれいかつくけふをなぬかなりける

右大将藤原實資うぶやの七夜に 平 兼 盛

こことれひ乃松の七日になりけりのこりのほこをれもひこそやれ

藤原誠信、元服を侍りける夜よみける

源 玄 太 が ぶ

老いぬれいれなと事こそせられけれきみのちよませきみのちよませ

れなじ賀に承平四年中宮の賀をいふ竹の杖つくりて侍りけるに

大 中 臣 頼 基

一ふしにちよをこめたるつゝあなれいつくともつきさきみかよはひの

五條内侍のかみの賀、民部卿清貫を侍りける時、屏風

に 伊 勢

れほそらにむれるたつのさしなかられもふこころ乃ありけなるかな

亭子院歌合に み つ ね

みちこそになるてふもこのことよりはななくはるにあひにけるかな

題とらず よ み 人 志 ら ず

みなつきのなことはらへする人のちこそいのちのふこいふなり

承平四年、中宮乃賀と侍りける屏風に

参 議 伊 衡

みそさしてれもふ事をそのりつるやほよろつよのかみのまにく

かゞみいさせ侍りけるうらに、つるのかたを、いつけ

させ侍りて 伊 勢

ちこそとも何かいのらんうらにすむたつのうへをを見るへかりける

たいとらず よ み 人 志 ら ず

さみかよのあまのはころもまれにきてなつともつきぬいはほならなん

拾遺集別歌

ものへまかりける人のもこに、人くまかりて、かはら

けこりて 會 根 の よ し た い

かりかねのかへるをさけいわかれちゆくもるはるかにおもふばかりそ

たいしらす

よみ人しらす

わかれてふここのたれかはしめけんくるしきものこあらすや有けん

十月ばかりに、物へまかりける人に た、み

瞬にたにあてしとおもひし人もそをくれふるころたひにゆきける

ものへまかりける人に、馬の餞と侍りて、扇つかはし

ける よしのぶ

わかれちをへたつる雲乃ためにこそあふきのかせをやらまほしけれ

源よしたねが、参河の介にて侍りける、むすめ乃も

こに、母乃讀みてつかはしける

もろこもにゆかぬ三かは乃やつはしつこひとこのみやおもひわたらん

みちのくにのかみこれともが、まかりくたりけるに

彈正乃みこの、かうやくつかはしけるに

戒秀法師

かめやまにいくくすりのみありけれのこむるかたもなきわかれかな
肥後守にて、清原元輔くたり侍りけるに、源満仲、せん
し侍りけるに、かはらけこりて もとすけ
いかばかりおもふらんこかおもふらんおいてわかるよこほきわかれを

拾遺集雜歌

月を見侍て

中務卿具平親王

世にふるに物れもふこもなけれともつきにいくたひなかめまつらん

清慎公家屏風に

つらゆき

れもふこありこのなとに久かた乃つきよこなれねられさりけり

法師にならんこ、思ひ立ち侍りける頃、月をみ侍りて

藤原たかみつ

かくはかりへかたく見ゆる世の中らうらやましくもすめるつきかな

大覺寺に、人々あまたまかりたりけるに、ふるき瀧をよみ侍りける
右衛門督公任

たき乃いこへたえて久そく成りぬれと名こそなかれてなほきこえけれ

野宮に、齋宮乃庚申忘けるに、松風入夜琴といふ題を、

よみ侍りける
齋宮女御

琴乃ねにみねの松かせかよふらといつれ乃をより忘らへそめけん

おなじ御時延喜御時をいふ大井に行幸ありて人々に歌よませ

給ひけるに
つらゆき

おほる川かはへ乃松にこころはんかよるみゆきやありとむかじも

物へまかりける人に、ぬさつかはとける、衣ほこに、う

きままのかたを侍りて
よしのぶ

わたつみの波にもぬれぬうきままのまつにこころをよせてたのまん

題とらず
歌人しらす

かこ乃志ま松はらくしになくたつ乃あななかくしきくひこなとに

大江爲基がもこに、うりにまうできたりけるかゞみ

の、つゝみたりける紙に、書き付けて侍りける

よみ人しらす

けふまでとみるになみたのますかよみなれにしかけをひこにかたるな

菅原乃大臣、かうふりと侍りける夜、はよ乃よみ侍り

ける

久かた乃月のかつらもをるはかりいへのかせをゆふかせてしかな

題とらず
人まろ

あらなみいたてところもにかさならすあかしもすまおのかうらく

ながされ侍りけるみちにて、よみ侍りける

贈太政大臣

あまつほとみちもやこりもありなからそらにうさてもおほゆるかな

つかさごられて侍りける時、いもうこの女御乃も
に、つかりしける

平 貞 文

うき世に門させりとも見えなくになごかわか身のいてかてにする
題しらす

よみ人しらす

よのなかをかくいひくのはてくりにかにやいかにならんこすらん
ある所に、春秋いづれかまさるこ、こせ給ひけるに、

よみてたてまつりける

紀 貫 之

春秋におもひみたれてわきかねつこまにつけつうつるこころの

元良のみこ、承香殿のこころに、春秋いづれかまさる

こ、こひ侍りければ、秋もかこつ侍りこ、いひければ、

おもころまさくらを、これりいからこひて、侍りけ

れば

おほかたの秋にこころよせこはを見るこまいつれこもなご

題しらす

よみ人しらす

春いたし花乃ひこへにさくはかりもの、あはれいあきをまされる

圓融院のうへ、驚き郭公こ、いづれかまさるこ申せり、

れほせられければ

大 納 言 朝 光

をりからにいつれこもなきこりのねもいかさためんこきならぬ身の

歌合乃、あはせずなりにけるに

よみ人しらす

水乃あわやたねこなるらん浮草のまくひこなみのうへにれふれい

草合し侍りける所に

惠 慶 法 師

たねなくてなき物草のれひにけりまくてふここのあらごを思ふ

なぞく物がたりしける所に

そねのよしと

わかここのえもいはころ乃むすひ松ちこせをふこもたれかこくへき

能宣に、車乃かをも、こひにつかはして、侍りけるに、侍

らすこひひて、侍りけれい

藤 原 仲 文

かきさしてうまこいふ人ありければかきさきこたれもふなるへこ
返と よしのぶ

なごこいへりきこむかきさきやれもふらんかやうまこをいふへかりける

廉義公家乃かみるに、あをうまある所に、あじ乃花毛

乃馬、あるところ 惠慶法師

なには江乃芦のはなけのまこれるつのかひ乃駒にやあるらん

つのかみに侍りける人乃もこにて、よみ侍りける

た い み

なにはかたきけりあへる君か代にあとかるわさをせねなるへこ

いせ乃みやすん所、うみ奉りたりけるみこの、なくな

りにけるが、かきさきたりける繪を、ふぢつほより、れ

いけいせん乃、女御のかたに、つかはしたりければ、こ

の繪をかへすこて 麗景殿みやのきみ

なまき人乃かたみこれもふにあやしまいゑみてもそてのぬるなりけり

源重之が母の、近江のこふに侍りけるに、うまでの、あづま

より、よるのほりて、いそぐこ侍りて、え此のたびへ、あ

そのほりぬる事こ、いひて侍りければ、おほの女の、よみ侍

りける

れやのれやと思ひまきかひこひてまじわかこのこにあらぬなるへこ

内侍馬が家に、右大将實資が、わらはに侍りける時、こ

うちにまかりたりければ、物かぬさうこそ、かけ物

にして侍りけるを見侍りて 小野宮太政大臣

いつこかこあけて見たれはま千鳥あるこにあこのなまきかな

かへこ

こしめても何にかいせんはまちこりふりぬるあこのなみにをえつこ

拾遺集雜春

帥乃みこ、人々に、うたよませ侍りけるに

弓削 嘉首

山さこの家居のかすみこめたれこかきねのやなまきするのこに見ゆ

春、花山に、亭子法皇、おのこまして、かへらせ給ひけ

れり

侍 正 遍 昭

までこいひいこもかここと花山にるのこなかんごりのねもかな

こんぐうち侍りける時、畑焼き侍りけるを見て、讀み

侍りける

藤 原 長 能

かた山にはたやくをのこかの見ゆるみやまさくらひよきてはたやけ

螢をよみ侍りける

健 守 法 師

夜もすからもゆるはたるをけさみれりこの葉こにつゆそおまひる

一條攝政の北方、ほかに侍りけるころ、女御ご申しけ

る時

贈 皇 后 宮

まはしたにかけにかくれぬこきりなほうなたれぬへきなてここのはな

拾遺集雜秋

圓融院の御屏風に、秋の野に、いろくの花、さきみた

れたる所に、たかすゑたる人あり 平 兼 盛

いへつこにあまたの花もをるへきにねたくもたかをすゑてけるかな

延喜十九年九月十三日、御屏風に、月にのりて翫潺湲

よみ人しらす

もよじまのおほみやなからやそまを見るところちするあまのよのつき

八月に、人の家のつりとのに、まらうとあまたありて、

月を見る

ま た が ふ

水のおもにやこれる月ののこけまゝなみりてひこのねぬ夜なれりか
右大將定國家の屏風に

み っ ね

すみの江の松を秋かせふくからにてあうちそふるおまつあらなみ
三百六十首の中に

曾 根 好 忠

みやま木を朝な夕なにこりつめてさむさをこふるをのしすみやま
には鳥のこほりのせきにこちられてたま藻のやごをかれやあぬらん

拾遺集雜賀

屏風に

伊 勢

はるくこ雲をささしてゆく舟のゆくすまこほくおもほゆるかな

東宮のいしなどりのしこめとければ、三十一を、つ

つみて、ひこつに、ひこもじをかまて、まるらせける

よみ人しらす

苦むさゝひろひもかへんさよれいこのかすをみなごるよはひいくよそ

ある人の産して侍りける、七夜 も と す け

松か枝のかよへるえたをこくらにてすたてらるへきつるのひなかな

大貳國章、うまごのいかに、わりをてうじて、歌をるに

かゝせける

松のこけちこせをかねておひまけれつるのかひこのすこも見るへく

ある人の、賀と侍りけるに、 權 中 納 言 敦 忠

ちこせふる霜のつるをいおきながらひさこきものいさみにそ有ける

中將に侍りける時、右大辨源致方朝臣のもこへ、やへ

紅梅を折りてつかはすこて 右 大 將 實 資

流俗のいろにあらす梅花

むねかたの朝臣

ちんちようすへき物ごこを見れ

教科 中古歌選 卷の下

新古今集春歌

春たつころをよみ侍りける 攝政太政大臣

みよしの山もかすみてあら雪のふりにしきこにはるはきにけり

春のはじめのうた 太 上 天 皇

ほのくさ春こそ空に來にけらとあまのかくやまかすみたなひく

百首歌奉りし時春のうた 式 子 内 親 王

山ふかみ春ともあらぬ松の戸にたえくかよるゆきのたまみつ

五十首歌奉りし時 宮 内 卿

かきくらし猶ふる里の雪の内にあここと見えねはるはきにけり

入道前關白太政大臣右大臣に侍りける時百首歌よ

ませ侍りけるに、立春の心を

皇太后宮大夫俊成

けふこいへりもろこしまても行く春をみやこにのみこおもひけるかな

題とらず

俊恵法師

春こいへりかすみにけりなきのふまてなみまに見えとあはちあまやま

西行法師

岩間とちと氷もけさのこけ初めてこけのまたみつみちもこむらん

百首歌奉りし時

藤原家隆朝臣

谷川のうち出つる波もこゑたてつうくひすさをへはるのやまかせ

和歌所にて、關路驚こいふことを

太上天皇

鶯のなけともいまたふる雪にすまの葉をろさあふさかのやま

家の百首歌合に、餘寒の心を

攝政太政大臣

そらり猶かすみもやらす風さえてゆきけにくもるはるのよのつき

詩をつくらせて、歌に合せ侍りしに、水郷春望こいふ

事を

左衛門督通光

みしま江や霜もまたひぬあしのはにつのくむほこのはるかせそふく

藤原秀能

夕月夜をほみちくらしなには江のあしわか葉をこゆるあらなみ

春の歌にて

西行法師

ふりつみと高根のみ雪とけにけりさよたさかはのみつのあらなみ

百首歌奉りし時

前大僧正慈圓

あまのはらふこのけふりの春のいろのかすみになひくあけほのよそら

をのことも、詩をつくりて、歌に合せ侍りしに、水郷春

望こいふ事を

太上天皇

見わたせの山もこかすみなせ川ゆふへのあきこなにれもひけん

攝政太政大臣家百首歌合に、春曙こいふ心を讀み侍り

ける

藤原家隆朝臣

かすみたつ末の松山はのくこなみにはなるよよこくものそら
守覺法親王五十首歌、よませ侍りけるに

藤原定家朝臣

春のよのゆめのうき橋たえしてみねにわかるよよこくものそら
おほそらへ梅のにはひにかすみつよくもりもはてぬはるの夜のつき
二月雪落衣といふ事を、よみ侍りける

康資王母

梅ちらす風もこえてや吹きつらんかをれるゆきのそてにみたるよ
文集、嘉陵春夜詩、不明不暗朧々月といへることをよみ
侍りける

大江千里

てりもせすくもりも果てぬ春のよのおほろつき夜にちくものそなき
祐子内親王、藤つほに住み侍りけるに、女房、うへ人な
と、さるべき限り、物語して、春秋のあはれ、いつれにか、

心ひくなど、あらそひ侍りけるに、人々ほく、秋に心

をよせて、侍りけれ

菅原孝標女

あさみこり花もひこつにかすみつよおほろに見ゆるはるの夜のつき

百首歌奉りし時

源具親

なにはかたかすまぬ波もかすみけりうつるもくもるおほろつき夜に

攝政太政大臣家、百首歌合に

寂述法師

いまのこてたのむの鴈もうちわひぬおほろつき夜のあけほのよそら

刑部卿頼輔、歌合を侍りけるに、よみてつかはしける

皇太后宮大夫俊成

さく人をなみたへおつるかへるかりなきてゆくなるあけほのよそら

歸鴈を

攝政太政大臣

わするなよたのむの澤をたつかりもいなはのかせのあさのゆふくれ

百首歌奉りし時

かへるかりいまはの心ありあけにつまこはなこの名こそをしけれ

守覺法親王五十首歌に

藤原定家聖臣

霜まよふそらに志をれし雁かねのかへるつはさにはるさめをふる

閑中春雨といふ事を

大僧正行慶

つくくこ春のなかめのさひしきり志のふにつたふのきのたまみつ

清輔朝臣のもこにて、雨中苗代といふ事を讀める

勝命法師

雨ふれのをたのますらをいこまあれやなはしろみつを空にまかせて

題とらす

太宰大貳高遠

うちなひき春の來にけりあをやまのかけふむみちにひこのやすらふ

輔仁親王

みよこのよたほ川のへのふるやなきかけこを見えねはるめきにけり

建仁元年三月歌合に、霞隔遠樹といふ事を

權中納言公經

たか瀬さすむつたのよこの柳原みこりもふかくかすむはるかな

千五百番歌合に、春歌

藤原雅經

あら雲のたえまになひく青柳のかつらさやまにはるかせをふく

藤原有家朝臣

あを柳の糸に玉ぬくあらつゆのあらすいく世のはるかへぬらん

題とらす

曾根好忠

あら小田の去年のふる跡のふるよもき今のはるへこひこはえにけり

百首歌奉りし時

式子内親王

いまさくらさきぬと見えてうす曇りはるにかすめる世のけしきかな

花のうたごてよみ侍りける

西行法師

よしのやまこそをりの道かへてまた見ぬかたのはなをたつねん

和歌所にて、歌つかうまつりしに、春の歌とて讀める

寂 逆 法 師

かつらきやたかまの櫻さきにけりたつたのおくにかゝるまらくも

和歌所歌合に、霧旅花さいふ事を 藤 原 雅 經

岩根ふみかさなる山をわけすてよはなもいくへのあごのまらくも

千五百番歌合に、春歌 皇太后宮大夫俊成

いく年のはるに心をつくときぬあはれこれもへみよこのよはな

千五百番歌合に 皇太后宮大夫俊成女

風かよふねさめの袖の花のかにかをるまくらのはるの夜のゆめ

攝政太政大臣家に、五首歌よみ侍りけるに

皇大皇宮大夫俊成

又や見んかたのくみのよさくらかりはなのゆきちるはるのあけほの

山里にまかりてよみ侍りける 能 因 法 師

山さこのはるの夕くれきてみれいりあひのかねにはなそちりける

百首歌めしよ時、春の歌

源 具 親

時ともあれたのむのかりの別さへはなちるころのみよこのよさこ

見山花さいへる心を

大 納 言 經 信

山ふかみ杉のむらたち見えぬまでをへのかせにはなのちるかな

五十首歌奉りし中に、湖上花を

宮 内 卿

花さそふひらのやま風ふきにけりこきゆくふねのあご見ゆるまで

關路花を

あふさかやこするの花をふくからにあらとをかすむせきのすきむら

百首歌奉りし時、春のうた

二 條 院 讚 岐

山たかみ峯のあらとにちる花のつきにあまさるあけかたのそら

最勝四天王院障子に、吉野山かきたる所

みよと野の高根の櫻ちりにけりあらとちもまろきはるのあけほの

千五百番歌合に

藤 原 定 家 朝 臣

さくらいろのにはの春風あごもなごはよそひごのゆきごたに見ん

ひごよせ忍びて、大内の花見に、まかりて侍りしに、庭

にちりて侍りし花を、硯のふたにいれて、攝政のもこ

につかはし侍りし

けふたにも庭をさかりごうつるはなきえすのありごも雪かごも見よ

返し

さそはれぬ人のためごやのこりけんあすよりささのはなのをらゆき

五十首歌奉りし時

さくら花ゆめかうつゝかをらくものたえてつれなきみねのはるかせ

残春の心を

よし野山花のふる里あごたえてむなごきえたにはるかせをふく

小野宮のおほきおほいまうちぎみ、月輪寺に花見侍

りける日よめる

太上天皇

攝政太政大臣

藤原家隆朝臣

攝政太政大臣

清原完輔

たかためにあすの残らん山さくらごほれてにはへけふのかたみに

紀貫之、曲水宴し侍りける時、月入花灘暗しいふ事

をよみ侍ける

花なかつ瀬をも見るへき三か月のわれていりぬるやまのをちかた

千五百番歌合に

おもひたつ鳥のふるすもたのむらんなれぬるはなのあごの夕くれ

ちりにけりあはれ恨の誰れなれはなのあごごふはるのやまかせ

權中納言公經

春ふかくたつねいるさの山のはにはの見ごくものいろそのこれる

堀河院御時、百首歌奉りけるに

岩根こすきよ瀧川の早けれはなみをりかくるやまふきのはな

五十首歌奉りし時

暮れてゆく春のみなごのをらねごもかすみにおつるうちのをはふね

寂述法師

題とらす

皇太后宮大夫俊成女

いそのかみふるのわさ田をうちかへしうらみかねたる春のくれかな

山家暮春こゝいへる心を

宮内卿

柴の戸をさすや日かけのなこりなくはるくれかよるやまのはのくも

新古今集夏歌

更衣を讀み侍りける

前大僧正慈圓

ちりはてゝ花のかけなき木のもこにたつこやすきなつころもかな

夏のはじめの歌にて、よみ侍りける

皇太后宮大夫俊成女

をりふしもうつれのかへつ世の中のひこのころのはなそめのそて

題とらす

太宰大貳重家

うの花のささぬるときは白妙のなみもてゆへるかさねこを見る

齋院に侍りける時、神たちにて

式子内親王

わすれめやあふひを草に引きむすひかりねの野へのつゆのあけほの

最勝四天王院の障子に、あさかの沼かさたる所

藤原雅經

のへいまたあさかのぬまにかる草のかつ見るまよにまけるころ哉

崇徳院に、百首歌奉りけるとき、夏歌

待賢門院安藤

さくらあさのをふの下草茂れたあかてわかれしはなの名なれハ

題とらす

藤原元真

夏草のまけりにけりな玉はこのみちゆきひこもむすふはかりに

大中臣能宣朝臣

ほこしきすなきつゝ出つるあしひきのやまこなてこ暎にけらしも

入道前關白、右大臣に侍りける時、百首歌よませ侍り

けるこき郭公歌

皇太后宮大夫俊成

むかしおもふ草のいほりのよるの雨になみたなをへそ山ほこよきす
雨をよく花たちはなに風すきてやまほこよきすくもになくなり

百首歌奉りし時夏歌中に

民部卿範光

郭公猶ひこころおもひいてよおいそのもりの夜半のむかしを

時鳥をよめる

八條院高倉

ひこころおもひをあへぬほこよきすたそかれこきの雲のまよひに

題とらず

藤原家隆朝臣

いかにせんこぬよあまたのほこよきすまたとこ思へむらさめの空

百首歌奉りしに

式子内親王

こゑりして雲路にむせふ郭公をみたやをよくよひのむらさめ

題とらず

西行法師

きかすこもこよをせにせんほこよきす山田のはらのすまのむらたち

郭公ふかきみねよりいてにけりこやまのすそにこゑのおちくる

山家暁郭公こいへる心を

後徳大寺左大臣

をさよふくちつのまろ屋のかりのこをあけかたになくほこよきす哉

五首歌人々によませ侍りける時夏歌さて讀み侍り

ける

攝政太政大臣

うちちめりあやめをかをる郭公なくやさつきのあめのゆふくれ

五月五日くつ玉つかはし侍りける人に

大納言經信

あかなくにちりにし花の色々のこりにけりなきみかたもこに

山畦早苗こいへるこころを

さなへこる山田のかけひもりにけりひくちめなはにつゆそこほるよ

五月雨の心を

藤原定家朝臣

玉はこの道ゆき人のこころつてもたえてほこふるさみたれのそら

百首歌奉り時

前大納言忠良

あふちさくそごもの木陰露おちてさみたれはるゝかせわたるなり

五十首歌奉り時

藤原定家朝臣

さみたれの月つれなき山よりひとりもいつるはこゝさすかな

題しらす

左衛門督通具

ゆくすゑをたれ志のへこて夕かせにちきりかおかんやこのたちはな

五十首歌奉り時

前大僧正慈圓

さつきやみみとかき夜はのうたゝねに花たちはなのそてにすゝとき

守覺法親王五十首歌よませ侍りける時

藤原家隆朝臣

ゆふくれいつれの雲のなこりこてはなたちはなにかせのふくらん

題不知

惠慶法師

我が宿のそごもにたてるならの葉のちけみにすゝむなつゝ來にけり

攝政太政大臣家百首歌合に、鵜河を讀み侍りける

前大僧正慈圓

うかひふねあはれこそみるものゝふのやそうちかはの夕やみの空

寂蓮法師

鵜かひ舟高瀬さとしすほこなれやむすほゝれゆくかゝり火のかけ

百首歌奉り時

攝政太政大臣

いさり火のむかしの光ほのみえてあじやのさごにさふはたるかな

式子内親王

窓ちかき竹の葉すさふかせの音にいこゝみとかさうたゝねのゆめ

鳥羽にて、竹風夜涼といふ事を、人々つかうまつりし

春宮権大夫公繼

まご近きいさゝ村竹風ふけりあきにおころくなつの夜のゆめ

家百首歌合に

攝政太政大臣

かさねても涼しかりけり夏ころもうすきたもこにやこるつきかけ

題とらず

西行法師

道のへに清水なかるゝ柳陰をほととてこそたちこまりつれ

千五百番歌合に

權中納言公經

露すかるにはの玉さうちなひきひこむらすきぬゆふたちのくも

夏月をよめる

源三位頼政

庭のおもひまたかわかぬに夕立のそらさりけなくすめるつきかな

百首歌奉りし時

攝政太政大臣

なく蟬のこゑも涼しきゆふくれにあきをかけたるもりのをたつゆ

千五百番歌合に

宮内卿

かた枝さすをふの浦梨はつあきになりもならずもかせを身にこむ

新古今集秋歌

百首歌に、はつ秋の心を

崇徳院御歌

いつしかと萩のはむけのかたよりこそよあきこそかせもきてゆる

藤原季通朝臣

このねぬる夜のまに秋のまにけらとあさけのかせのきのふにもにぬ

百首歌、よみ侍りける中に

藤原家隆朝臣

きのふたにこはんご思ひしつこの國のいくたのゆりにあきへ來にけり

守覺法親王、五十首歌よませ侍りけること

あけぬるか衣手さむとすかはらやふとみのさこのあきのはつかせ

千五百番歌合に

攝政太政大臣

ふか草の露のよすかを契にてさこをりかれすあきへ來にけり

左衛門督通具

あはれ又いかにまのはん袖のつゆ野はらのかせにあきへ來にけり

崇徳院に、百首歌奉りける時

皇太后宮大夫俊成

みちふつきうるま山田にひたはへてまた袖ぬらすあきの來にけり

題とらず

後徳大寺左大臣

夕されハ萩の葉むけを吹くかせにこそともなくなみたおちけり

百首歌に

式子内親王

うたハねの朝けの袖にかはるなりならずあふきのあきのはつかせ

七夕のうたにてよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

たなはたのこわたる舟の梶の葉にいくあきかきつつゆのたまつさ

守覺法親王五十首歌よませ侍りけるに

顯昭法師

萩かはなまそてに掛けて高まこのをへのみやにひれふるやたれ

千五百番歌合に

左近中將良平

夕されハ玉ちるのへのをみなへしまくらさためぬあきかせそふく

蘭をよめる

公猷法師

ふちはかまぬハ誰れともあら露のこほれてにはふのへのあき風

崇徳院に百首歌奉りける時

藤原清輔朝臣

うす霧のまかきのはなの朝をめぐりあきハゆふへこたれかいひけん

題とらず

實之

山かつのかきはにさける朝かはハ志のよめならてあふよしもなと

敵人不知

をくらやまふもこの野への花すよきはのかに見ゆるあきの夕くれ

前大僧正慈圓

身にこまる思ひを萩のうは葉にてこのころかなしあきのゆふくれ

百首歌奉りし時

攝政太政大臣

をきの葉にふけハ嵐のあきなるをまちける夜はのさをしかのこあ

おとなへて思ひと事のかすくになほいろまさるあきのゆふくれ

題とらず

寂蓮法師

さひとさひ其の色こもなかりけりまきたつやまのあきのゆふくれ

西行法師

こころなき身にもあはれいぢられけりまきたつさはのあきの夕くれ

西行法師すゝめて百首歌よませ侍りけるに

藤原定家朝臣

見わたせいはなも紅葉もなかりけりうらのこまやのあきのゆふくれ

五十首歌奉りし時

藤原雅經朝臣

たへてやい思ひありこもいかゝせんむくらのやこのあきのゆふくれ

秋の歌きてよみ侍ける

式子内親王

それなからむかしにもあらぬ秋風にいこゝなかめをまつのをたまき

攝政太政大臣家百首歌合に

藤原有家朝臣

風わたるあさちかすゑのつゆにたにやこりもはてぬよひのいなつま

題とらず

藤原家隆朝臣

なかめつゝおもふもさひとひさかたのつきのみやこのあけかたの空

五十首歌奉りし時月前草花

攝政太政大臣

ふるさこのもごあらの小萩咲しよりよなくにはのつきそうつろふ

建仁元年三月歌合に山家秋月といふ事をよみ侍り

と

さきともあれ古郷人のおごもせてみやまのつきにあきかせをふく

八月十五夜和歌所の歌合に海邊秋月といふ事を

宮内卿

心あるをしまのあまのためこかなつきやこれこいぬれぬものから

崇徳院に百首歌奉りけるに

左京大夫顯輔

秋かせにたなひく雲のたえまよりぬれいつる月のかけのさやけさ

題とらず

式子内親王

宵のまにさてもぬぬへき月ならんやまのはちかきものいれもはと

ふくるまで詠むれりこそかなしけれおもひもいれとあきのよの月
家に、月五十首歌、よませ侍りける時

藤原定家朝臣

さむしろや待つ夜の秋の風ふけてつきをかたしくうちのはらひめ

和歌所歌合に、田家月を

前大僧正慈圓

雁の来るふしみの小田にゆめさめてねぬ夜のいほに月を見るかな

和歌所にて、をのことも歌よみ侍りしに、夕鹿を

ふことを

藤原家隆朝臣

またもみちかつちる山の夕暮くれぬれてやひこりあかのなくらん

題しらす

前中納言匡房

つまこふる鹿のたちこそ尋ぬれりさやまかすそにあきかせそふく

千五百番歌合に

前大僧正慈圓

なくあかのこゑにめさめて忍ふかな見はてぬゆめのあきの思ひを

題をらす

行

をやま田の庵ちかくなく鹿のねにおころかさされておころかすかな
さりくす夜さむに秋のなるまよによわるか聲のこほさかりゆく

百首歌の中に

式子内親王

あともなき庭のあさちにむすほしれつゆのそこなるまつむしの聲

千五百番歌合に、秋のうた

權中納言公經

衣うつみやまのいはのまはくもあらぬゆめちになすふ手まくら

和歌所歌合に、月のもこに、衣をうつこいふ事を

宮内卿

まごろまで詠めよこてのすさひ哉あさのさころもつきにうつこゑ

千五百番歌合に

藤原家定朝臣

秋とたにわすれんこおもふ月影をさあやにくにうつころもかな

攝衣の心を

藤原雅經

みよしの山の秋かせさよふけてふるさこさむくころもうつなり

月の歌にてよみ侍りける 大納言 經信

あきのよの衣さむしろかさねてもつきのひかりにまくものそをさ

五十首歌奉りし時 寂蓮法師

むらさめの露もまたひぬ槿のはにきりたちのほるあきのゆふくれ

秋の歌にて 太上天皇

さひしきのみ山の秋のあさくもりきりにをるまきのたつゆ

河霧といふ事を 左衛門督 通光

あけほのや川瀬の波のたかせふねくたすかひこのそてのあきより

題をらす 西行法師

よこ雲の風にわかるよきのよめにやまごひこゆるはつかりのこゑ

をら雲をつはさにかけて行く鴈のかきたのおものごもをたふなる

朝恵法師

むら雲や鴈のはかせにはれぬらんこゑさくそらにすめるつきかけ

五十首歌奉りし時 菊籬月といへるところを

宮内卿

霜をまつまかきのさくの宵のまにれさまよふいろのやまのはの月

題をらす 大江嘉言

ねさめする袖さへさむく秋の夜のあらむふくなりまつむしのこゑ

千五百番歌合に 左衛門督 通光

いり日さす麓のをはなうちなひきたかあきかせにうつらなくらん

題をらす 皇太后宮大夫 俊成女

あたにちる露のまくらにふと侘てうつらなくなりこのやまかせ

千五百番歌合に

いろかはる露をい袖におさまよひうらかれてゆく野へのあきかな

さくらのもみぢはじめたるをみて

中務卿具平親王

いつのまにもみちとぬらんやま櫻きのふかはなのちるをとみと
最勝四天王院の障子に、鈴鹿川かきたる所

太上天皇

すゝか川ふかき木の葉に日數へてやまたのはらの志くれをそま

左大將に侍りける時、家に、百首歌合を侍りけるに、は

はそをよみ侍りける 攝政太政大臣

はゝそはらまつくも色やはるらんもりの志たくさ秋ふけにけり

百首歌たてまつりし時、秋のうた 式子内

桐のはもふみわけかたくなりけりかならず人をまつこなけれこ

法性寺入道前關白太政大臣家歌合に

前參議 源隆

うつらなくかたのにたてるはと紅葉ちらぬはかりにあき風をふく

つの國に侍りける頃、道濟がもこに、つかはとける

能因法師

夏草のかりそめにこてこしかこもなにはのうらにあきをくれぬる

新古今集冬歌

千五百番歌合に、初冬のことろを、よめる

皇太后宮大夫俊成

おきあかすあさのわかれの袖の露もこそむすへふゆや來ぬらん

天曆御時、かみなづきこいふ事を、かみにおきて、歌つ

かうまつりけるに 藤原高光

神無月かせにもみぢのちるごさひをこはかさなくものをかなとさ

後冷泉院の御時、うへのをのことども、大井川にまか

りて、紅葉淨水こいへる心を、よみ侍りけるに

藤原資宗朝臣

筏士よまでここはん水上のいかはかりふくやまのあらじそ

大納言經信

ちりかよるもみち流れぬおほる河いつれるせきのみつのおからみ

深山落葉こいへる心を

源俊賴朝臣

日くるれいあふ人もなしまさきちる峯のあらじのおこはかりして

題をらす

藤原清輔朝臣

おのつからおこするもの庭の面に木の葉ふきまくたにのゆふ風

春日社歌合に落葉こいふ事を讀みて奉りし

七條院大納言

初まくれ志のふの山のもみちはをあらじふけこつをめすやあり劔

藤原秀能

山さこのかせすさまじき夕くれに木の葉みたれてものそかなじき

題をらす

法眼慶算

こまじもあれ冬ハ葉もりの神無月まはらになりぬもりのかとは木

津守國基

いつのまに空のけしきのかはるらんはけしきけさのこからこの風

西行法師

月をまつたかねの雲のはれにけりこよろあるへきはつとくれかな

清輔朝臣

柴の戸に入日のかげのさじなからいかにまくるよやまへなるらん

百首歌奉りしに

二條院讃岐

をりこそあれなかめにかよる浮雲の袖もひこつにうちまくれつよ

題をらす

宜秋門院丹後

ふきはらふあらじのよちの高根より木の葉くもらて月やいつらん

祐子内親王家歌合に讀み侍りける

藤原家經朝臣

鹿のねそねさめのここにかよふなるをのくさふと露やおくらん

江侍従

をくらやまたちこもみえぬ夕霧につまよこはせるをかをなくなる

物思ふここ有りける頃萩をみてよめる

伊勢大輔

おきあかじ見つゝ詠むる萩の上のつゆふきみたるあきの夜のかせ

百首歌中に

前大僧正慈圓

霜さゆる山田のくろのむらすよさかるひをなごにのこるころかな

うへのをのことも菊あはせと侍りけるついでに

あくれつゝかれゆくのへの花なれご志ものまかきにはふいろ哉

おなご御時延喜御時藤原子に菊宴歌はさける時をいふ大井河に行幸侍りける日

坂上是則

影さへにいまの菊のうつろふいなみのそこにもおもやおくらん

題をらす

西行法師

つの國のなにはの春のゆめなれやあごのかれ葉にかせわたるなり

崇徳院に十首歌奉りける時

大納言成道

冬ふかくなりけらしな難波江のあをはましらぬあごのむらたち

百首歌奉りし時

攝政太政大臣

たちぬるよ山のあつくも音たえてまきのあたはにたるひとにけり

題をらす

皇太后宮大夫俊成

かつこほりかつつくたくる山川のいはまにむせふあかつきのこゑ

さえかへり岩間にまよふ水のあわの志はしやごかるうすこほり哉

五十首歌奉りし時

みなかみやたえくこほる岩まよりさよたき川にのこるをらなみ

最勝四天王院の障子に、宇治川かきたる所

太上天皇

はとひめのかたしき衣さむらろにまつ夜むなしき宇治のあけほの

前大僧正慈圓

あじろ木にいさよふ波のおこふけてひこりやねぬるうちのはと姫

百首歌中に 式子内親王

見るまよに冬の來にけりかものる入江のみきはうすこほりつゝ

みちのくによまかりける時よみ侍りける

能因法師

夕されの志ほかせこしてみちのくのたのたまかはちこり鳴なり

題をらす 重之

志らなみにはねうちかはし濱ちこりかなとさものよはのひこ聲

後徳大寺左大臣

ゆふなまにこわたる千鳥波まより見ゆるこままのくもにさえぬる

堀河院に、百首歌奉りけるに 祐子内親王家紀伊

うらかせに吹上の濱のはまちこりなみたちくらしよはになくなり

千五百番歌合に 正三位秀能

さよ千鳥こゑこそちかくなるみかたかたふく月に志ほやみつらん

最勝四天王院の障子に、なるみのうらかきたる所

藤原秀能

風ふけのよそになるみのかた思ひおもはぬなみになくちこりかな

おなじ所 權中納言通光

うらひごの日も夕くれになるみ瀉かへるそてよりちこりなくなり

題をらす 能因法師

ねやのうへにかたえさしおほひ外面なる葉ひろからはに霞ふる也

百首歌に 式子内親王

さむしろのよはの衣手さぬくはつゆさるをかのへのまつ
雪のあした、後徳大寺左大臣のもこに、つかはしける

皇太后宮大夫俊成

けふいもと君もやこふこなかむれはまたあこもなきにはの雪かな

返し

後徳大寺左大臣

いまをさく心のあこもなかりけりゆきかさわけておもひやれこも
うへのをのことも、曉望山雪こいへる心を、つかう

まつりけるに

高倉院御歌

おこは山さやかに見するをら雪をあけぬこつくるこりのこまかな

百首歌奉りし時

藤原定家、朝臣

こまこめて袖うちはらふかけもなとさのゝわたりのゆきの夕くれ

攝政太政大臣、大納言に侍りける時、山家雪こいふ事

を、よませ侍りける

まつ人のふもこの道へたえぬらんのきはのすきにゆきれもるなり

内大臣に侍りける時、家歌合に 法性寺入道前關白太政大臣

御狩すこごたちの原をあさりつゝかたのゝ野へにけふもくらとつ

鷹狩の心をよみ侍りける

左近中將公衡

かりくらくかたのゝ眞柴折りあきてよこのかは瀬のつきを見る哉

百首歌奉りし時

式子内親王

日かすふる雪けにまさるすみかまのけふりもさひしおは原のさこ

年の暮に、よみ侍りける

皇太后宮大夫俊成女

へたてゆく世々のれも影かきくらくゆきこふりぬることの暮かな

題をらす

西行法師

むかしおもふ庭にうさ木をつみ置きて見し世にもにぬ年の暮かな

攝政太政大臣

いそのかみふるのゝをさゝ霜をへてひこ夜はかりにのこる年かな

土御門内大臣家にて、海邊歲暮さしへる心をよめる

寂 蓮 法 師

老のなみこはける身こそかなしけれことしおいまの末のまつやま
千五百番歌合に
皇太后宮大夫俊成

けふここにけふやかきりと思へとも又もここにあひにけるかな

新古今集賀歌

子日をよめる

藤 原 清 正

ねのひとておめつる野へのひめ小松ひかてやちよの影をまたまじ

七條后宮五十賀屏風に

伊 勢

すみの江の濱の眞砂をふむたつひささきあををこむるなりけり

延喜御時屏風歌

實 之

ことここにれひそふ竹のよよをへて變らぬいろをたれさか見ん

題をらす

藤 原 興 風

山川のさくのゑたみつかなれななかれてひこのおいをせくらん

延喜御時屏風のうたに

實 之

いのりつゝ猶なか月のさくのはないつれのあきかうゑて見さらん

文治六年、女御入内屏風歌

皇太后宮大夫俊成

やまひこのをる袖にはふさくの露うちはらふにもちよへぬへし

貞信公家屏風に

元 輔

かみを月もみちもあらぬときは木によろつ代かよれ峯のゑらくも

題をらす

伊 勢

山かせいふけこふかねとあら波のよするいはねひささかりけり

堀河院大嘗會御禊に、日ごろあめふりて、其の日にな

りて、空はれて、侍りければ、紀伊典侍に申しける

六 條 右 大 臣

君か代の千こせの數もかくれなくもらぬそらのひかりにそみる

新古今集哀傷歌

題 ちらす

併 正 遍 昭

すゑの露もこのまつくや世の中のれくれさきたつためとなるらん

六條攝政、かくれ侍りて後、うゑれきて侍りける牡丹

の、咲きて侍りけるを、折りて、女房のもこより、つか

はして侍りければ

太宰 大貳 重家

かたみこて見れぬ歎きのふかみ草なになかくのにはひなるらん

父秀宗、身まかりての秋、寄風懷舊といふ事をよみ侍

りける

藤 原 秀 能

露をたにいまいかたみの藤ころもあたれもそてをふくあらじかな

十月ばかり、水無瀬に侍りし頃、前大僧正慈圓のもこ

へ、ぬれて時雨のなと、申しつかはして、つぎの年の神

無月、無常の歌あまた讀みて、つかはし侍りし中に

太 上 天 皇

おもひ出つる折たく柴の夕けふりむせふもうれしわすれかたみに

返へし

前大僧正慈圓

思ひ出つるをりたく柴と聞くからにたくひかなしきあられぬ夕けふりかな

批把皇太后宮、かくれてのち、十月ばかり、かの宮の人

々の中に、たれごもなくてさしれかせける

相 模

かみな月くるよころもいかなれやそらにすきにと秋のみやひこ

後朱雀院、かくれ給ひてのち、源三位がもこに、つかは

しける

辨 乳 母

あはれきみいかなるのへのけふりにてむなしく空の雲となりけん

返へし

源 三位

おもへきみもえし烟にまかひなてたちれくれたるはるのかすみを
無常の心を

西 行 法 師

いつ嘆きいつおもふへきことなれんのちのよそらて人のすくらん

前 大 僧 正 慈 圓

みな人のちりかほにしてあらぬかなならずあぬる習ひありこい

新古今集離別歌

あさからず契りける人の、行きわかれ侍りけるに

紫 式 部

北へゆく鷹のつはさにこらつてよくものうはかまかきたえすして

太宰帥隆家、くたりけるに、扇をたまふこと

批 把 皇 太 后 宮

すしとさついきの松原まさるこもそふるあふまのかせなわすれそ

修行に出でたつこと、人のもこにつかはしける

道 命 法 師

わかれちのこれやかきりの旅ならん更にいへさこちこそせね

守覺法親王、五十首歌よませ侍りける時

藤 原 隆 信 朝 臣

誰ごともあらぬわかれの悲しきまつらのおきをいつるふなひこ

題 名 不 詳

藤 原 定 家 朝 臣

わするなよやこるたもこのかはるこもかたみにあはる夜半の月影

都のほかへまかりける人に、よみておくりける

惟 明 親 王

なこりおもふたもこにかねてあられけりわかるゝ旅の行末のつゆ

新古今集羈旅歌

あつまのかたに、まかりけるに、あさまのたけに、けふ
りのたつを見て、よめる 在原業平朝臣

志なのなるあさまのたけにたつ烟をちこちひこの見や、こかめぬ
するかの國、うつ山に、あへる人につけて、京につ
かはしける

するかなるうつ山へのうつしにも夢にもひこにはぬなりけり

題をらす

御形宜旨

みやこにてこむちの空を眺めつゝくもるこいひとほごにまにけり

後冷泉院御時、うへのをのことも、旅の歌讀み侍りけ

るに

左近中將隆綱

あしの葉をかりふく賤のやま里にころもかたじきたひねをそする

水邊旅宿こいへる心を、よめる 大納言經信

旅ねするあしのまろ屋の寒けれ、つま木こりつむふねいそくなり

旅宿雪こいへる心を、よみ侍りける

修理大夫顯季

松か根にをはなかりしきよもすからかたしくそてに雪のふりつゝ

守覺法親王家に、五十首歌よませ侍りけるに、旅の歌

皇太后宮大夫俊成

夏かりの蘆のかりねもあはれなりたま江のつきのあけかたのそら
たちかへりまたも来てみん松島やをしまのこまやなみにあらずな

藤原定家朝臣

こころへよ思ひおきつの濱ちごりなく、いしてあごのつさかけ

五十首歌奉りし時

家隆朝臣

あけの又こゆへき山のみねなれやそらゆくつきのすゑのちらくも

藤原雅經

ふるさこのけふのおもかけさそひこころつきにそちさる佐夜の中山

百首歌奉りし時

宜秋門院丹後

あらさりのやそせの波を分け過ぎてかたしくものゝ伊勢のはま萩
攝政太政大臣家歌合に、霧中夕嵐といふ事をよめる

藤原定家朝臣

いつくにかこよひの宿をかりころも日もゆふくれの峯のあららに

旅の歌よめる

たひ人の袖ふきかへすあきかせにゆふ日さひこきやまのかけはし

藤原家隆朝臣

ふるさとのにきし嵐のこゑもにすわすれぬひこさそやのなかやま

百首歌奉りし時、旅歌

ちきらぬこひこよの過ぎぬ清見かたなみにわかるゝあかつきの空

歌合を侍りける時、旅の心をよめる 入道前關白太政大臣

日をへつゝみやこをのふのうらさひて波よりほかの音つれもなし

千五百番歌合に

宜秋門院丹後

おほつかを都にすまぬみやこりこころさふひこにいかゝこたへし

百首歌奉りし時、旅歌

前大僧正慈圓

さこりゆくまことの道に入りぬれゝ戀しがるへさふるさともなし

新古今集雜歌

入道前關白太政大臣家、百首歌よませ侍りけるに、立

春のころを

皇太后宮大夫俊成

年くれしなみたのつらゝさけにけりこけのそてにも春やたつらん

題あらず

西行法師

世の中をおもへいなへてちる花のわか身をさてもいつちかもせん

攝政太政大臣、大將に侍りし時、月の歌五十首よませ侍

りけるに

前大僧正慈圓

ありあけの月のゆくへをなかめてそ野寺のかねり聞くへかりける
和歌所歌合に、深山曉月といふことを

鳴長明

夜もすからひこりみやまの槇の葉にくもるも澄めるありあけの月
熊野にまうで侍りし時奉りし歌の中に

藤原秀能

月すめりよものうきくも空にきえてみやまかくれをゆくあらじ哉
たいしらす

西行法師

捨つこならりうき世を出つる印あらんわれにゆくもれ秋の夜の月
長月の有明の頃、式子内親王におくれりける

惟明親王

思ひやれなにをまのふこなければさもみやこれほゆる有あけのつき

返へし

式子内親王

ありあけのおなごなかめり君もこへみやこのほかも秋のやまさと
月あかき夜、定家朝臣にあひて侍りけるに、歌の道に
心ざらふかき事、いつばかりよりの事にかこ、尋ね
侍りければ、わかき侍りし時、西行に久しくあひこも
なひて、聞きならひ侍りしよと申して、そのかみ申し
し事など、語り侍りて、かへりてあしたに、つかはしけ
る

法橋行遍

題をらす

神祇伯顯仲

あやしくそかへさる月の曇りにしむかたりに夜や更けぬらん
かもめるるふち江のうらの沖つ洲に夜ふねいさよふ月のさやけさ
和歌所の歌合に、海邊月といふことを

前大僧正慈圓

わかろうらに月の出汐のさすまゝによる鳴くつるのこゑを哀しき

藤原秀能

あかしかたいろなき人のそてを見よすゝろに月もやこるものか

熊野にまうで侍りしついでに、切目宿にて、海邊眺望

こいへる心を、そのことも、つかうまつりしに

具親

なかもよこおもはてしめや歸らん月まつなみのあまのつりふね

寄風懷舊、いふことを 左衛門督通光

あさちふや袖にくちにしあまの志あわすれぬ夢をふくあらじかな

皇太后宮大夫俊成女

葛の葉のうらみにかへるゆめの世をわすれかたみの野への秋かせ

なからの橋を、よめる 後徳大寺左大臣

朽ちにけるなからの橋をきてみれいあじのかれ葉にあき風そふく

天曆御時、屏風に

壬生忠見

あき風のせき吹きこゆるたひここにこゑうちそふる須磨の浦なみ

千五百番歌合に 正三位季能

水の江のよし野のみやのかみさひてよはひたけたるうらの松かせ

題をらす 前大僧正慈圓

よの中をこころたかくもいふかなふしの烟りを身のおもひにて

あつまのかたへ、修行し侍りけるに、ふしの山を見て

よめる 西行法師

風になひくふしの烟のそらにさえてゆくへもあらぬ我おもひかな

守覺法親王、五十首歌よませ侍りけるに、閑居の心を

よめる 有家朝臣

誰れかひと思ひたえてもまつにのみおこつれてゆく風うらめし

鳥羽にて、歌合し侍りしに、山家嵐といふことを

宜秋門院丹後

山ささの世のうきよりもすみわひぬこのほかなる峯のあらじに

題をらす

西行法師

やま深くさこそころの通ふともすまてあはれんあらんものか

山家送年といへる心をよみ侍りける

寂蓮法

たちいてよつま木折りこし片をかかふかきやまちこなりにける哉

百首歌奉りし時

二條院讃岐

なからへてなほ君か代をまつ山のまつこせしまにこしそへにける

たいをらす

殷宮門院大輔

かさし折るみわのまけ山かきわけてあはれこそ思ふすき立てる門

春日社歌合に松風といへることを有 家朝臣

われなから思ふかものをこはかりにそてにあくるよにはのまつ風

題をらす

西行法師

やまさこにうき世いこはん友もかなくやしく過むかたかたらん

山家歌あまたよみ侍りけるに

前大僧正慈圓

山ささの問ひくる人のこころさのこのすまひこそうらやましくけれ

題をらす

西行法師

ふるはたのそはのたつ木にゐる鳩のこもよみ聲のすこきゆふくれ

山家の、やまかけの片をかかけてむる野のさかひにたてる玉のをやなま

まけき野をいくひこ村にわけなとしてさらにむかを忍ひかへさん

前大僧正慈圓

おもはねこ世をそむかんといふ人のおなじ敷にやわれも入りなん

西行法師

れろかなるころのひくに任せてもさてさのいかにつひの思ひ

述懐の心をよめる

大僧正慈圓

なにここを思ふ人そこひこはよこたへぬさきにそてそぬるへさ
打たへて世にふる身にあらぬともあらぬすちにもつみを哀しさ

最勝四天王院の障子に大淀かきたるころ

藤原定家朝臣

おほよこの浦にかりほすみるめたにかすみにたえてかへる鴈かね

題あらす

西行法師

いつくにもすまれす唯すまてあらん志はの庵の志はなる世に

五十首歌の中に

前大僧正慈圓

おもふことなご問ふ人のなかるらんあふけのそらに月そさやけさ

大神宮歌合に

太上天皇

大そらにちさるれもひのごともへぬつきひもうけよゆくすゑの空

前大僧正慈圓文にて思ふほどのごとも申しつく

しがたきよし申しつかはして侍りける返事に

前右大將頼朝

みちのくのいはてあふいえそしらぬ書つくとしてよつほの石ふみ

題あらす

皇嘉門院

なにさかやかへにれふなる草の名よそれにもたくふ我身なりけり

題あらす

宮内卿

竹の葉にかせふきよわる夕くれのものあはれあきごともなご

和泉式部

夕暮のくものけしきを見るからになかめご思ふころこそつけ

くれぬめり幾日かくて過ぬらん入あひのかねのつくくごとして

教科適用 中古歌選 終

告原吉ニ
作ル一告ニ
ニ依テ改本
ム原今加ニ
作ル今加ニ
茂翁ノ説加
ニ依テ改本
ム原今加ニ
作ル今加ニ
居翁ノ説加
依テ改本
許ノ下今
原ナシ今
釋万葉今
引ク所ニ
紀州本ニ

中古歌撰附錄

長歌

天皇御製歌

籠毛與美籠母乳 布久思毛與美夫君志持 此岳爾 菜採須兒
 家告閉 名告沙根 虛見津 山跡乃國者 押奈戶手 吾許會
 居 師吉名信手 吾己會座 吾許會者 背齒告目 家乎毛名雄
 毛

天皇御登香具山望國之時御製歌

山常庭 村山有等 取與呂市 天乃香具山騰立 國見乎爲者
 國原波 烟立龍 海原波 加萬目立多都 忒伶國會 靖島 八

依テ補フ
龍原古ニ
作ル古寫
本拾穂本
等ニ依テ
改ム

能梓ノ二
字原上下
ニ誤ル今
元曆本ニ
依ル

間跡能國者

天皇明遊獵内野之時中皇命使間人連老獻歌上同

八隅知之 我大王乃 朝廷 取撫賜 夕庭 伊緣立之 御執乃

梓弓之 奈加弭乃 音爲奈利 朝獵爾 今立須良思 暮獵爾

今他田渚良之 御執能 梓弓之 奈加弭乃 音爲奈里

反歌

玉刻春 内乃大野爾 馬數而 朝布麻湏等六其深野

幸讚岐國安益郡之時軍王見山作歌上同

霞立 長春日乃 晚家流 和豆肝之良受 村肝乃 心乎痛 奴

要子鳥 卜歎居者 珠手次 懸乃宜久 遠神 吾大王乃 行幸

丈原大ニ
作ル

能 山越風乃 獨居 吾衣手爾 朝夕爾 還比奴禮波 丈夫登

念有我母 草枕 客之有者 思遣 鶴寸乎白土 網能浦之

海處女等之 燒塩乃 念曾所燒 吾下情

反歌

山越乃 風乎時自見 寐夜不落 家在妹乎 懸而小竹櫃

天皇詔内大臣藤原朝臣競憐春山萬花之艷秋山千葉之彩時

額田王以歌判之歌上同

冬木成 春去來者 不喧有之 鳥毛來鳴奴 不開有之 花毛佐

家禮杼山乎茂 人而毛不取草深 執手母不見秋山乃 木葉乎見

而者 黃葉乎婆取而曾思奴布 青乎者 置而曾歎久曾許之恨之

秋山吾者

天皇天御製歌上同

三芳野之耳我嶺爾 時無會 雪者落家留 間無會 雨者零計類
 其雪之 時無如 其雨乃 間無如 限毛不落 思乍叙來 其
 山道乎

或本歌

三芳野之耳我山爾時自久曾雪者落等言無間會雨者落等言
 其雪不時如其雨無間如限毛不墮思乍叙來其山道乎

幸于吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作歌上同

八隅知之吾大王之 所聞食 天下爾 國者思毛 澤二雖有 山

川之 清河内跡 御心乎 吉野之國之 花散相 秋津乃野邊爾
 宮柱 太敷座波 百磯城乃 大宮人者 船並氏 旦川渡 舟競
 夕河渡 此河乃 絕事奈久 此山乃 彌高良之 球水激 瀧
 之宮子波 見禮跡不飽可母

反歌

雖見飽奴 吉野乃河之 常滑之 絕事無久 復還見牟
 安見知之吾大王 神長柄 神佐備世瀆登芳野川 多藝津河内爾
 高殿乎 高知座而 上立國見乎為波 疊有 青垣山 山神乃
 奉御調等 春部者花挿頭持 秋立者 黃葉頭刺理遊副川之神母
 大御食爾仕奉等 上瀬爾鷓川乎立 下瀬爾 小網刺渡 山川母

依氏奉流 神乃御代鳴

反歌

山川毛 因而奉流 神長柄 多藝津河内爾船出爲加母

藤原宮之役民作歌上同

八隅知之吾大王 高照日之皇子 荒妙乃 藤原我宇倍爾食國乎
賣之賜牟登 都宮者 高所知武等 神長柄 所念奈戶二 天
地毛 緣而有許曾 磐走 淡海之國乃衣手能 田上山之 眞木
佐久檜乃婦手乎物乃布能八十氏河爾 玉藻成 浮倍流禮其乎取
登 佐和久御民毛 家忘 身毛多奈不知鳴自物 水爾浮居而
吾作 日之御門爾 不知國依 巨勢道從 我國者常世爾成牟

高ハ爲ノ

圖負留 神龜毛 新代登 泉乃河爾 持越 眞木乃都麻手乎百
不足 五十日太爾作派須良牟 伊蘇波久見者神隨爾有之

藤原宮御井歌上同

八隅知之和我大王 高照日之皇子 荒妙乃 藤原我原爾 大御
門 始賜而 埴安乃 堤上爾 在立之 見之賜者 日本乃青香
具山者 日經乃大御門爾 春山跡 之美佐備立有畝火乃此美豆
山者 日緯能大御門爾彌豆山跡山佐備伊座 耳高之 青菅山者
背友乃 大御門爾 宜名倍 神佐備立有 名細 吉野乃山者
影友乃 大御門從 雲井爾曾遠有家留高知也 天之御蔭 天知
也 日之御影乃水許曾波常爾有米 御井之清水

短歌

藤原之 大宮都加倍 安禮衝哉處女之友者 乏吉呂賀聞

原乏ヲ石之
ニ呂ヲ今
ニ誤ル抄
依類ル

天皇崩之時太后御作歌

八隅知之我大王之 暮去者 召賜良之 明來者 問賜良之神

岳乃 山之黃葉乎 今日毛鴨問給麻思 明日毛鴨召賜萬旨 其

山乎 振放見乍 暮去者 綾哀 明來者 裏佐備晚 荒妙乃

衣之袖者 乾時文無

高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

挂文 忌之伎鳴 言久母 綾爾畏伎 明日香乃真神之原爾 久

堅能 天津御門乎 懼母 定賜而 神佐扶跡磐隱座 八隅知之

吾大王乃 所聞見爲背友乃國之真木立不破山越而拍劍 和射

見我原乃行宮爾 安母理座而 天下 治賜 食國乎 定賜等鳥

之鳴 吾妻乃國之 御軍士乎喚賜而 干磐破 人乎和爲跡 不

奉仕 國乎治跡 皇子隨任賜者 大御身爾大刀取帶之 大御手

爾 弓取持之 御軍士乎安騰毛比賜 齊流 鼓之音者 雷之

聲登聞麻低 吹響流 小角乃音母敵見有 虎可叫吼登 諸人之

協流麻低爾 指舉有 幡之靡者 冬木成 春去來者 野每

著而有火之 風之共 靡如久 取持流 弓波受乃騷 三雪落

冬乃林爾 颺可母 伊卷渡等 念麻低 聞之恐久 引放箭繁

大雪乃 乱而來禮 不奉仕立向之毛 露霜之 消者消倍久 去

使原便ニ
誤ル今古
寫本拾穂
本等ニ依
ル
地原垣ニ
誤ル

左原右ニ
誤ル

鳥乃 相競端爾 渡會之 齋宮從 神風爾 伊吹惑之 天雲乎
 日之目毛不令見常闇爾覆賜而定之 水穗之國乎 神隨 太敷座
 而 八隅知之吾大王之天下 申賜者 萬代 然之毛將有登木綿
 花乃榮時爾 吾大王 皇子之御門乎神宮爾 裝束奉而 遣使御
 門之人毛 白妙乃 麻衣著 埴安乃 御門之原爾赤根刺 日之
 盡鹿自物 伊波比伏管鳥王能 暮爾至者 大殿乎 振放見乍
 鵝成伊波比廻 雖侍候 佐母良比不得者春鳥之佐麻欲比奴禮者
 嘆毛未過爾 憶毛 未盡者 言左敝久百濟之原從 神葬 葬座
 而 朝毛吉 木上宮乎 常宮等 高之奉而 神隨 安定座奴
 雖然吾大王之 萬代跡 所念食而 作良志之香來山之宮 萬代

爾 過牟登念哉 天之如 振放見乍 玉手次 懸而 將偲 恐
 有騰文

短歌二首

久堅之天所知流 君故爾 日月毛不知 戀渡鴨
 埴安乃 池之堤之 隱沼之 去方乎不知舍人者迷惑

譜岐狹岑島視石中死人柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌上

玉藻吉 讚岐國者 國柄加 雖見不飽 神柄加 幾許貴寸 天
 地 日月與共 滿將行 神乃御面跡 次來 中乃水門從船浮而
 吾榜來者 時風 雲居爾吹爾與見者 跡位浪立邊見者 白浪
 散動 鯨魚取 海乎恐 行船乃 梶引折而 彼是之 鳥者雖多

名細 狹岑之島乃荒磯回爾廬作而見者 浪音乃茂濱邊乎 敷妙
 乃 枕爾爲而 荒床 自伏君之 家知者 往而毛將告妻知者
 來毛問益乎玉梓之 道太爾不知鬱悒久 待加戀良武愛伎妻等者

反歌

妻毛有者採而多宜麻之佐美乃山野上乃宇波疑過去計良受也
 奧波 來依荒磯乎色妙乃 枕等卷而 奈世流君可聞

山部宿禰赤人望不盡山歌一首并短歌

天地之分時從 神佐備而高貴寸 駿河有布士能高嶺乎天原
 振放見者 度日之 陰毛隱比照月乃 光毛不見 白雲母 伊去
 波代加利時自久曾雪者落家留語告 言繼將往 不盡能高嶺者

反歌

田子之浦從打出而見者眞白衣 不盡能高嶺爾雪者零家留

詠不盡山歌一首并短歌上

奈麻余美乃甲斐乃國打緣流 駿河能國與已知其智乃國之三中從
 出立有 不盡能高嶺者天雲毛 伊去波伐加利飛鳥母 翔毛不
 上 燎火乎 雪以滅 落雪乎 火用消通都言不得 名不知 靈
 母 座神香聞 石花海跡名付而有毛彼山之 堤有海會 不盡河
 跡人乃渡毛其山之 水之當鳥 日本之 山跡國乃 鎖十方 座
 神可聞 寶十方 成有山可聞駿河有 不盡能高峯者雖見不飽香

反歌

不盡嶺爾零置雪者 六月十五日消者 其夜布里家利
 布士能嶺乎高見恐美 天雲毛 伊去羽計 田菜引物緒

右一首高橋連蟲麻品之歌中出焉以類載此

令反感情歌一首并序

或有人知敬父母忘於侍養不顧妻子輕於脫履自稱畏俗先生意氣雖
 揚青雲之上身体猶在塵俗之中未驗修行得道之聖蓋是亡命山澤之
 民所以指示三綱更開五教遺之以歌令反其惑歌曰

父母乎 美禮婆多布斗斯妻子美禮婆米具斯宇都久志余能奈迦波
 加久叙許等和理母智騰利乃可良波志母與由久弊斯良爾婆宇既

具都遠奴伎都流其等久布美奴伎提由久智布比等波伊波紀欲利奈
 利提志比等迦奈何名能良佐禰阿米弊由迦婆奈何麻爾麻爾都智奈
 良婆大王伊麻周許能提羅周日月能斯多波阿麻久毛能牟迦夫周伎
 波美多爾具久能佐和多流伎波美企許斯遠周久爾能麻保良叙可爾
 迦久爾保志伎麻爾麻爾斯可爾波阿羅慈迦

反歌

比佐迦多能阿麻遲波等保斯奈保奈保爾伊弊爾可弊利提奈利乎斯
 麻佐爾

思子等歌一首并序

釋迦如來金口正說等思衆生如羅喉羅又說愛無過子至極大聖尙有

愛子心況乎世間蒼生誰不愛子乎

宇利波米娑胡藤母意母保由久利波米娑麻斯提斯農波由伊豆久欲
利枳多利斯物能曾麻奈迦比爾母等奈可利提夜周伊斯奈佐農

反歌

銀母シロカ子モ 金母ゴカ子モ 玉母タマ子モ 奈爾世武爾麻佐禮流多可良古爾斯迦米夜母

筑前國怡土郡深江村子負原臨海丘上有二石大者長一尺二寸六分

圍一尺八寸六分重十八斤五兩小者長一尺一寸圍一尺八寸重十六

斤十兩並皆橢圓狀如雞子其美好者不可勝論所謂徑尺璧是也或云此

之石當占而取之 去深江驛家二十許里近在路頭公私往來莫不下馬跪

拜古老相傳曰往者息長足日女命征討新羅國之時用茲兩石挿著御

原稱ア壁
ニ壁ルア壁

袖之中以爲鎮懷所以行人敬拜此石乃作歌曰

可既麻久波阿夜爾可斯故斯多良志比咩可尾能彌許等可良久爾遠
武氣多比良宜豆彌許々呂遠斯豆迷多麻布等伊刀良斯豆伊波比多
麻比斯麻多麻奈須布多都能伊斯乎世人爾斯咩斯多麻比豆余呂豆
余爾伊比都具可彌等和多能曾許意枳都布可延乃宇奈可美乃故布
乃波良爾美豆豆可良意可志多麻比豆可武奈何良可武佐備伊麻須
久志美多麻伊麻能遠都豆爾多布刀伎呂可憐

阿米都智能等母爾比佐斯久伊比都夏等許能久斯美多麻志可志家
良斯母上同

貧窮問答歌一首并短歌上

雜原離ニ
本今拾
波原可下
之今拾
本依ル

互乞ハ乞
ラノ誤ナ

風雜 雨布流欲乃雨雜 雪布流欲波爲部母奈久寒之安禮婆 堅
 鹽乎 取都豆之呂比糟湯酒 宇智須須呂比豆之波夫可比鼻毗之
 毗之爾志可登阿良農比宜可伎撫而安禮乎於伎豆人者安良自等
 富己呂倍騰寒之安禮波 麻被 引可賀布利布可多衣 安里能許
 等其等伎曾倍騰毛寒夜須良乎 和禮欲利母貧人乃 父母波 飢
 寒良牟 妻子等波乞乞泣良牟 此時者 伊賀爾之都都可汝代者
 和多流
 天地者 比呂之等伊倍杼安我多米波狹也奈理奴流 日月波安可
 之等伊倍騰安我多米波照哉多麻波奴人皆可我 吾耳也之可流
 和久良婆爾比等等波安流乎比等奈美爾安禮母作乎 綿毛奈伎

良ハ長ノ
誤カ

布可多衣乃 美留乃其等和和氣佐我禮流可布能尾肩爾打懸
 布勢伊保能麻宜伊保乃內爾 直土爾 藁解敷而 父母波 枕乃
 可多爾 妻子等母波足乃方爾 圍居而 憂吟 可麻度柔播火氣
 布伎多豆受許之伎爾波久毛能須可伎豆飯炊 事毛和須禮提奴延
 鳥乃 能杼與比居爾伊等乃伎提短物乎 端伎流等 云之如 楚
 取 五十戶良我許惠波寢屋度麻低來立呼比奴 可久婆可里須部
 奈伎物能可世間乃道
 世間乎 守之等夜佐之等於母倍杼母飛立可彌都 鳥爾之安良彌
 婆

詠上總末珠名娘子一首并短歌集

水長鳥 安房爾繼有 梓弓 末乃珠名者 胸別之 廣吾妹 腰
 細之 須輕娘子之 其姿之 端正爾 如花 咲而立者 玉梓乃
 道行人者 已行 道者不去而 不召爾 門至奴 指並 隣之
 君者 預 已妻離而 不乞爾 鎰左倍奉 人乃皆 如是迷有者
 容艷 緣而曾妹者 多波禮豆有家留

反歌

金門爾之人乃來立者 夜中母 身者田菜不知出曾相來

詠水江浦島子二首并短歌上

春日之 霞時爾 墨吉之 岸爾出居而 釣船之 得乎良布見者
 古之 事曾所念 水江之 浦島兒之 堅魚釣 鯛釣矜 及七日

管原菅ニ
 作ルハハ
 ナルハハ
 本ニ誤ル
 本ニ誤ル

家爾毛不來而海界乎 過而榜行爾 海若 神之女爾避爾 伊許
 藝趁 相詭良比 言成之賀婆 加吉結 常代爾至 海若 神之
 宮乃 內隔之 細有殿爾 携 二人入居而 老目不為死不為而
 永世爾 有家留物乎世間之 愚人之 吾妹兒爾告而語久 須
 夷者 家歸而 父母爾 事毛告良比 如明日 吾者來南登 言
 家禮婆妹之答久 常世邊爾復變來而 如今 將相跡奈良婆 此
 篋 開勿勤常 曾己良久爾堅目師事乎 墨吉爾 還來而 家見
 跡 宅毛見金手 里見跡 里毛見金手 惟常 所許爾念久 從
 家出而 三歲之間爾 端毛無 家滅目八跡 此篋乎 開而見手
 齒 如本來 家者將有登 玉篋 小披爾 白雲之 自箱出而

清原清ニ
作ル今拾
穂本ニ從

常世邊 棚引去者 立走 叫袖振 反側 足受利四管 頓情
消失奴 若有之 皮毛皴奴 黑有之 髮毛白斑奴 由奈由奈波
氣左倍絶而 後遂 齋死邪遂 水江之 浦島子之 家地見

反歌

常世邊 可住物乎 劔刀 已人心柄 於曾也是君

詠霍公鳥一首并短歌上

鷲之 生卵乃中爾 霍公鳥 獨所生而 已父爾 似而者不鳴已
母爾 似而者不鳴宇能花乃 開有野邊從 飛翻 來鳴令響 橋
之花乎居令散 終日 雖喧聞吉 幣者將爲 爲遐莫去 吾屋
戸之花橋爾 住渡鳥

菅原舞ニ
誤ル

反歌

攝霧之 雨零夜乎 霍公鳥 鳴而去成 何怜其鳥

登筑波山歌一首并短歌上

草枕 客之憂乎 名草漏 事毛有武跡 筑波嶺爾登而見者 尾
花落 師付之田井爾 瀉毛 寒來喧奴 新治乃 鳥羽能淡海毛
秋風爾 白浪立奴 筑波嶺乃吉久乎見者 長氣爾 念積來之
憂者息沼

反歌

筑波嶺乃須蘇廻乃田井爾 秋田苺 妹許將遣 黃葉手折奈

七夕歌一首并短歌上

久堅乃 天漢爾 上瀨爾 珠橋渡之 下湍爾 船浮居 雨零而
 風不吹登母 風吹而 雨不落等物 裳不令濕 不息來益常玉
 橋渡須

反歌

天漢 霧立渡 今日且今日吾待君之 船出爲等霜

過葦屋處女墓時作歌一首并短歌上同

古之 益荒丁子 各競 妻問爲祁牟 葦屋乃 菟名日處女乃與
 城矣 吾立見者 永世乃 語爾爲乍 後人 偲爾世武等 玉梓
 乃 道邊近 磐構 作冢矣 天雲乃 退部乃限 此道矣 去人
 每行因 射立嘆日 惑人者 啼爾毛哭乍語嗣 偲繼來 處女

等賀 輿城所 吾并 見者悲嘗 古思者

反歌

古乃 小竹田丁子乃 妻問石 菟會處女乃輿城叙此
 語繼 可良仁文幾許戀布矣 直目爾見兼 古丁子

詠勝鹿真間娘子歌一首并短歌上同

鷄鳴 吾妻乃國爾 古昔爾 有家留事登 至今 不絕言來 勝
 牡鹿乃真間乃手兒奈我麻衣爾 青衿着 直佐麻乎裳者織服而
 髮谷母 搔者不梳 履乎谷 不著雖行 錦綾之 中丹裏有 齋
 兒毛 妹爾將及哉望月之 滿有面輪二 如花 咲而立有者 夏
 蟲乃 入火之如 水門入爾 船已具如久歸香具禮 人乃言時

著原看ニ
 誤齋原齊ニ

時毛 不生物乎 何爲跡歟身乎田名知而 浪音乃 騷湊之 奧
 津城爾妹之臥勢流 遠代爾 有家類事乎 昨日霜 將見我其登
 毛所念可聞

反歌

勝牡鹿之 眞間之井見者立平之 水挹家牟 手兒名之所念
 冬木成 春去來者 朝爾波 白露置 夕爾波 霞多奈妣久 汗
 湍能振樹奴禮我之多爾鷺鳴母

右一首 萬葉第十三

三諸者 人之守山 本邊者 馬醉木花開 末邊方 椿花開 浦
 妙山曾 泣兒守山

振恐ラク
ハ夜高ノ
誤ナルヘ

有越原越
有ニ作ル
ハ眼カ
天目原早
ニ作ル

右一首 上同

天橋文 長雲鴨 高山文 高雲鴨 月夜見乃持有越水 伊取來
 而公奉而 越得之目天母

反歌

天有 月日如 吾思有 公之日異 老落惜毛

右二首 上同

沼名河之底奈流玉 求而 得之玉可毛 拾而得之玉可毛 安多
 良思吉君之老落惜毛

右一首 上同

中古歌撰附錄終

明治三十四年五月十六日印刷
明治三十四年五月廿三日發行

〔中古歌謡〕
定價金參拾五錢

東京市麴町區元岡町二丁目五十番地

編纂者 三輪義方

全 京橋區南傳馬町二丁目五番地

發行者 目黒甚七

全 日本橋區通三丁目十番地

發行者 河出靜一郎

全 神田區小川町一番地

印刷者 多田榮次

全 神田區小川町一番地

印刷所 愛善社

116
102

